神秘道への辯明

序

嚴然とした内容を保ち乍らも、宗教は今だに辯明の辭を重ねてゐる。然しかかる必要は早く去らねばならぬ。久遠の眞理は非難に傷つく眞理ではない。四圍を躙ふ辯護の言葉こそは薄弱な立場の裏書である。嘗て太陽はその光を放つのに一言の辯疏を加へたらうか、山嶽は聲なくして安らかに横つてゐる、宗教も亦萬年の基礎を人間の内裡に横へてゐる筈である。否、未だ嘗て人間が地上に生れ出ない最初のその日から宗教は永存する。之に對する多くの懷疑も誹謗も、亦辯護の辭柄も、その安泰な存在に何の動搖をか加へ得るであらう。宗教は權

威ある自律の宗教たるべき筈である。

然し時として時代はかゝる辯護をすら欲してゐる。眞理が屢〻辯明の形式で發言せられたのは淋しい必要であつた。「アポロギア」Apologia は古くプラトーの世に終つたのではない。近世神學の祖シュライエルマッヘルも彼の宗教論を「辯護」の一章を以て書き起した。近くはニューマンが企てた辯明の聲もまだ吾々の耳朶に殘つてゐる。余は此一篇が等しくアポロギアの爲であるのを悲む。然し余が愛する此題材は長い間誤認の許に受難の苦を重ねてゐる。余は自から保護の位置に立たねばならぬ。然し正當な辯護は早くかゝる事の反復を此世から除きたい心に基いてゐる。辯明はそれが最後の辯明でありたい事を希つてゐる。

いつか眞理は光として說かれねばならぬ。人は彼の信念に於て强大であるべき筈である。自由には强さの美があるが、顧慮には陰の惱みがある。輝く光は雲に對して訴への辭を設けはしまい。暗雲の帳を越えて彼はゆるやかに光つて

ゐる。宗教はいつか人生の太陽でありたい。凡ての辯明が無益になる時こそは、やがて宗教が白光を放つ時であらう。余は未來に此願望を抱いて、今は辯明の言葉を敢て余が愛する眞理の上に加へたい。

一、神秘と不明とに就て

神秘と云へば何人も把捉し得ない模糊とした內容を聯想する。不分明と云ふ批評の追隨によつて、嘗ては溫い理解を托するに足りた此言葉も、今は却て侮りの的である。よし此字を好んで選ぶとしても、僅に心を幽妙に賴る陰の意味に終つてゐる。光として之を說く者は旣に理知を失したと云ふ誹りを免れ得ない。神秘とは只理知の及を恐れる者が、敢て幽玄に身を委ねる隱れ家であると云はれてゐる。神秘への愛着は理性の敗滅であり、不明への信賴である。丁度

日光を厭ひ夜陰を喜ぶ梟の樣に、知解を避けて不明に安じる心には常に陰の醜さがある。若しも幽玄の名によつて理知を排するなら、それは懷疑への滿足と云ふ思想の停止に過ぎぬ。若しも分明にし得ないで神秘を語るなら、それは單に許し得ない獨斷を許したと云ふ迄である。かゝる態度は知としては何の解明を與へず、情としては只不安を購ふに過ぎぬ。特に勃興した科學的氣運に際して、かゝる神秘道は何の歸依をも受ける筈がない。凡てが理知によつて批判される此時代に、神秘と云へば寧ろ明かな侮蔑の意がある。科學があらゆる超自然的內容を知識の國土から驅逐し去らうとする今日、或者は此字義と共に遠く昔の魔法 magic をさへ聯想する。占星と試金 Alchemy とに命數を定めた是等凡ての靈術は今は只面白げな追憶に過ぎない。科學が尙も精密に入らうとする未來に對して、神秘道は只無意味な復古の敎であると見做されてゐる。畢竟一切は知によつて解決せられねばならぬ、人間の理想と滿足とは不明なものゝ完全な

討伐にある。之が彼等の所有する大きな抱負である。人々は云ふ、神秘はいつか分明に代らねばならぬと。實際神秘道が受ける何事よりも著しい不幸は此不分明と云ふ意味の聯想である。

果して神秘が是等の不順を伴ふなら、余の理性も亦かゝる批評の味方でありたい。何人か不明への信賴に宗敎を求め得るであらう。光を慕ふ木の芽は陰の地から出ようとする。解明を幽閉する凡ての敎へは只疾病に惱む信仰に過ぎぬ是等の非難が正當であるなら、神秘は早く地上から失はれねばならぬ。然し余は充全の理由を以て神秘に久遠の生命を賦らさうとするのである。

もとより是等の頁はかゝる非難に對する辯明の爲である。然し以下の解答は敢て超自然を擧示し、又は科學の價値を卑下する事によつて神秘の保壘を築かうとする企ではない。不可思議と云ふ事はものゝ內容を深めはしない。不明への辯護は不明を追加したと云ふ迄に過ぎない。精密科學に對する凡ての非難は

啻に余の理性の爲すべき事でないのみならず、かゝる態度は人文の開發にとつて無益な反逆である。少くとも吾々の眞理は理知以下の內容であつてはならぬ。理性の破壞は決して信仰を溫め得ない。科學を否定する事によつて宗教の樹立を圖るのは妄念である。只然し一般の科學者が理知の名の許に信仰の自律を疑ふのを、一層激しい妄念であると余は斷じるのである。

理知は懷疑に厭く事を知らぬ、實際疑問こそ眞理への發足である。神秘も亦理知の對象として他と何の選ぶ所がない。嘗ては疑惑を絕した信仰の事項も今は一個の平明な分析の資料である。知は一切を疑ひの對象とする。此傾きは怪むに足りない。だが驚く可き事實は、理知が理知自らの內容に對して未だ嘗て徹底した何等の批判をも試みないと云ふ矛盾である。理知は凡てを知識に活かさうとするが自らに關しては殆ど無知に近い。科學が理知に立脚する限り科學者の爲すべき第一の義務は、理知に關する明確な概念の獲得にある。凡ての科

學書はその第一章を科學批判に始めねばならぬ。余は彼等から神秘に就ての正當な理解を期待する前に、理知そのものに就ての明白な解答を所有したい。余は科學が宗教に加へる一切の妄念は、切に理知に關する理解の不明に基くのであると考へてゐる。彼等が充全なものとして絕對の信賴をおこさうとする理知に對して、余は少くとも一層批判的でありたい。

果して知解が眞理に絕對値を與へるだらうか、理知の解明が唯一の分明な眞理であらうか、分明が信仰を托し得る最後の理由であらうか、是等を反省する事こそ理知の務めであらねばならぬ。若し是等を會得し得るなら宗教を科學に移さうとする彼等の企て、特に又神秘の自律を否定し去らうとする彼等の批評を正當な審判に持ち來す事が出來るであらう。果して神秘は不明の別辭であらうか、只不可解なるが故に神秘であらうか、此信仰の懷抱は科學への否定であらうか、神秘の道は理知を恐れる道であらうか。是等の批評こそ先づ分析せられね

ばならぬ。人々にとつては理知が神秘へ加へる及である。然し余は神秘こそ理知へ加へるべき及であると信じてゐる。吾々は既に科學以下の內容に就て辯ずべき言葉を持たない、余の注意は少くとも理知の水平線より始まらねばならぬ。然も理知の優秀を信じる今日、それは一層高い見地から批判される必要がある。

頂きは一つであるが是に登る路は多岐である。若しもその路を唯一であると斷じるなら、人々はその稚愚を笑ふであろう。然し之は比喩に止るのではない、茲に一切のものは理知の對象たり得ると云ふ考想がある。少くとも理知が觸れ得ない世界の存在を認許し得ないなら、科學者の此抱負は實に世界を一面に開展しようとする異常な企てゞある。眞理は凡て科學的であらねばならぬとするのが彼等の思潮である。出來得るなら、神をも理知によつて購ひたいのである。若しも之を購ひ得ないなら、神の存在は否定されたと云ふがその傲然とした結論であらう。然し之は多樣な世界を只一面に局限したもの丶見方である。立體

であるべき世相が平面によつて傳へられたと云ふ迄ではあるまいか。余は異る世界の存在を示す爲に次の例證を選ばうと思ふ。

科學の趨勢は明かに神話的擬人法からの脫出である。昔人間の吉凶を語らつた自然の現象は、漸く神話の手を離れて、批判を理性の哲學に求めた。然し靈の事に屬した此第二の見方が、物質に奪ひ去られる日はまもなく來た。自然哲學の名稱が科學の名によつて示されて以來、特殊な事象も遂に幾何かの普遍的法則に還元された。此人間からの離脫と自然の獨立とが科學の與へた敎へである。主觀から客觀へ、感情から理知へ、想像から實證へ、特殊から一般への推移、一言で云へば擬人法からの離脫が科學の方向である。一切の法則は太初からの法則である。人間が地上にあると否とを問はず果されねばならぬ法則である。個人の自由な作爲ではない、既に決定せられた自然の計畫である。科學の美は機械の美である。

然し美はこの一面にのみ終るだらうか、吾々の傍には正に之に反逆する美の世界が嚴在する。此世界に於て機械は醜である、決定は死である、法則は邪である、美を與へる力は反省ではない、直觀である。此鋭い對比を示すのは藝術の世界である。科學に對し藝術の目途は個性への貫入にある。人間への滲透がひとり藝術を清淨にする。美は實に個性の美である、人間そのものゝ表現である。默する萬有によく人間の心を讀む時、彼こそは詩人である。盡きる事ない人間の象徵、之が藝術の世を通じる不斷の流れである。科學は人間を離れようとし藝術は人間に入らうとする。法則は個人を退け詩美は一般を排する。自然の運行に自由の介在は紊亂である。藝術の作動に規矩の闖入は破滅である。藝術は自由を心とし、凡ての定義を厭ふ。永遠の暗示こそその生命である。機械は藝術に於て醜の醜である。

扨人は屢々反省する、何れの世界が眞實であらうかと。此二つの流れは鋭い

對比である。然し人は何が故に對立を避けてその一面をのみ撰ばうとするのであらうか。理知を以て藝術を空に感じる時、科學者は世界を一面に見る罪を犯してゐる。時として藝術の眞を保存する爲に、科學の僞を稱へようとする。然しそれは藝術家の誤認である。多樣な世界が吾々に與へる敎訓は各々の世界の分有に關する自覺である。想ふに科學者の任務は先づそれが所有する分野に就ての謙讓な承認であらねばならぬ。分野は限界である。實に科學的眞理は此限界に於ての眞理である。吾々は古今を通じる法則の永遠性を疑ふ事は出來ぬ。只かゝる眞理が常に科學的である事を忘る可きではない。一切は理知の對象であらう、只かゝる場合それが理知の單位に基く計量である事を看過してはならぬ。單位は特殊の約束である。科學的約束に立つ眞理が、何等全般の又唯一の眞理でない事は自明である。理知が持つ可き第一の自覺は此分野に關する明確な理解であらねばならぬ。

問題は必然理知そのものゝ內容に歸つてくる。知解の所業は分析である。分析は比較に及んで玆に知識を構成する。必然一切の科學的知識は相對を原則とする。吾々が持つ運動の概念、空間の知識、音響、色彩、一として此約束の從順な保有でないものはない。所詮その內容は「彼」に對する「是」であり、その歸結は「然」であるか「否」かである。斷定は畢竟相對の性質を出ない。之は理知が保存する論理の法則そのものに原因する。論理は二個の矛盾する內容の對比に發して、その何れかの撰擇に終る。自同、矛盾、排中の三法則が與へる約束は、對立の豫件に基く取捨である。之は一切の論理的斷案がその命數上相對的比較によつて始めて可能であると云ふ裏書である。科學は畢竟此差別知の範圍を出ない。永遠普遍と目せられる科學的眞理も、此條件を具備しての眞理である。その分明も亦差別の域を出る事がない。凡ての科學的知識は一定の限界と一定の約束とに立脚する固定的知識である。必然世界及人生の理解を科學の一門によつてのみ盡し得るとする態度は、只科學の隆盛に伴つた變態な氣運に過ぎない。理知の過重は時として理知の殺傷である。

玆に若し差別相對を絕する內容があつたなら、科學的理解は之に對して可能であらうか。必然沈默が科學のとるべき正當な態度である。然し人々は如何なる問題も知の對象であり得ると屢々考へてゐる。だが此の妄想が自らを裏切る時は幾何もなく來るであらう。理知の力は是對彼の差別に終る。是彼の彼岸を求め、然否の一致を求めようとする要求に對しては理知はその刃を納めねばならぬ。人は差別に不滿である、相對を脫し絕對を慕ひ、二元を去つて自律につく心こそは宗教である。絕對は差別を許さぬ、無差別を追ふ心が宗教心である。理知の差別によつて宗教の位置を奪はうとする企ては理知に缺けた暴逆に過ぎない。理知によつて破られたものは信仰ではなく理知自身である。知解が產む眞理は宗教に於ては尙不足である。人は之をしも尙唯一であり最後である理由と

見做すだらうか、知の分明すら力なくせられる別種の世界を否む事は出來ない。實に宗教の使命はかゝる世界の示現にある。

人々は知解し得ないと云ふ故を以て神秘を難じてゐる。不分明と云ふ聯想も理知を無視した內容と云ふ意味である。だがそれは理知的に不明であると云ふ迄に過ぎない。理知的に不明であると云ふ事はそのものゝ分明性を直ちに否定する事とはならぬ。かゝる不明は凡て或立場からしては不明であると云ふ迄である。知解が差別を示すなら綜合を示すのが神秘である。無差別な內容が差別にとつて不明であるのは、理知の不足をこそ示すが神秘への非難にはならぬ。論理的理知が神秘を單に不可解と評するのも只自然な歸結に過ぎない。差別は綜合ではない。相對的態度は對絕値の理解を許さぬ。神秘は實に論理的意味に於て可解の內容ではない、だが同時に不可解の世界でもない。可解をも許さず不可解をも絕した不許解の世界である。神秘を直ちに非科學的として卑下するのは

此不可解と不許解との錯誤に基いてゐる。實に神秘は科學的でもなく亦非科學的でもない。既に科學的知解を許さぬ規範的內容である。

知解し得べき程の眞理はまだ相對の眞理である。絕對を心とする宗教は差別を言下に絕する。知解をすら許さぬ嚴然とした自明の眞理であつてこそ信仰に價する。解かるべき眞理はそれに對して不なる可からずとの意であつて、不なるを許さぬ規範的謂ではない。神秘は規範的要求である、差別知を容れぬ價値である、知の分明をすら越える統體である。況んや知解以下の不分明ではあり得ない。神秘とは知を絕した世界である。

人々は理知によつて證明し得べき眞理が信ずるに足りる唯一の眞理であると考へてゐる。時としてかゝる要求は神の存在をすら證明し樣と企てゐる。然し之は閑かな仕事に過ぎない。宗教は立證せられると否とに關はらず嚴存する宗教である。吾等が內心の求める所は自律の眞理である、證明し得ずとも尙存在す

るが如き內容こそ余の心を托するに足りる。實に證明をすら許さぬ眞理であつて始めて絕對である。證明を待つて明かな眞理はよし確信を購つても信仰を產まない。自然の法則を信ずと云ふ事と神を信ずと云ふ事とは全然別義である。證明し得べき眞理は科學に止る、證明を許さぬ眞理であつて始めて宗敎を示現する。分明は只理知の事に屬する。明晰と云ふ事をすら許さぬのが神秘である。それは明不明を越えた內容である。之を漠然とした不明の義に解するのは只貧弱な理解の痼疾に過ぎぬ。理知の明晰は單な差別である。自律なる明晰に比べては尙陰に等しい。何人が神秘を不明と呼び得るであらう。自明がその面目である。神秘は既に知解を許さぬ、それは批判し得べき對象とはならぬ。自明なるが故に只認許せらるべき自律の內容である。神秘は凡ての疑ひを容れぬ。信仰は試みる心を卑む、「神を試みざれよ」とイエスは云つた。ブレークの歌に

'He who doubts from what he sees

Will ne'er believe, do what you. please.
If the sun and moon should doubt,
They'd immediately go out.'

自律なる分明、それが神秘の世界である。否、明不明の區劃をすら許さぬ未分の境こそその意味である。

科學は分別を旨とし、宗敎は未分を心とする。知の分明は矛盾を避け、信の敬念は矛盾を絕する。理知は分析に事相を理解し、神秘は統一に眞諦を保持する。絕對はひとり未分の裡に宿る。差別は本然の姿ではない。是と云ひ彼と云ひ、明と云ひ暗と云ふも凡て貧しい區別に過ぎぬ。一切は淡然として言語を絕する。眞に離言自證がその面目である。分明への執着は抑々末技である。

科學の眞理は知解すべき眞理であるが、宗敎の眞理は體得の眞理である。知解の法則は三段の論法であるが、神秘の理解は一段の直觀である。理知は眞理

を前に置くが、信仰はそれを内に抱く。第三者としての觀察に知識があり、第一者としての合一に體得がある。前者は知る事によつて味はれ、後者は味ふ事によつて知らるゝのである。科學は云ふ、「吾々は知る」と、然し宗教は云ふ「吾々は味ふ」と。眞に卽如に關して吾々の知は何の知る處がない。然し吾々の心は獨りそれを味ふ。クラショー Crashaw が「聖テレサ」Sainte Teresa の歌に

'She never undertook to know
What death with love should have to doe;
Nor has she e're yet understood
Why to show love, she should shed blood
Yet though she cannot tell you why,
She can Love, & she can Dy.'

解く事を許さぬ内容を認めるのは科學への侮蔑であらうか。否、之こそは知の否定ではなくその解脫である。世界が理知の差別に終るならば科學は自らの

桎梏に惱まねばならぬ。未分の世界こそ吾々が追ひ求める心の國土である。人は生れ乍ら相對の域に安じる術を知らぬ。宗教はかゝる求めの示現である。想ふに未だ分れない太初のその深みに、吾れ等の心は生を發してゐる。人々は之を省みて長い間分別の勞を重ねた。だが心はたえずその故郷を慕つてゐる。人はこの未分の鄕を神秘と名づけた。吾々はいつか分別からの解脫を遂げねばならぬ。此悅びは只神秘の味ひに於てのみ滿されてゐる。然し理知に慣れた人々は差別を離れた故を以て之に不明の罪を數へて居る。然し未分なるものゝみ自明である。神秘の自明に比べては理知の分明は尙陰に近い。「明」を絕對義に解する時、それは神秘と云ふ事を離れては思惟し得べくもない。

神秘とは事を秘する意でない、密に親しむ意である。不明なるが故の神秘ではない、自明なるが神秘である。明と云ひ不明と云ふも只貧しい言葉に過ぎぬ。自律なるものゝ前に理知は沈默せねばならぬ。更に說く可き差別の相が無いか

らである。三祖「信心銘」に「虛明自照、心力を勞せざれ。非思慮の所識情測り難し。眞如法界、他なく自なし」と。

二　神秘道と流派とに就て

此思想の脈流を人々は主義 ism の名によつて傳へてゐる。流派に基く規定の桎梏から脱れて自由な道を憧れた此思潮を、神秘道とこそ云ふ可きであらうが、習慣は語尾に主義の字を添へて之を神秘主義（説又は論）Mystic-ism と呼んでゐる。恐らく嘲る者が與へた侮蔑の意に萠した言葉であらうが、然し一般の用語として今は長い經歷を殘してゐる。たえず形式の信仰を破つて自由を呼び覺ました此一連の思潮は、何れの宗教史をも飾る活々とした事例であつた。思想の固着に信仰の死を見た彼等の理解は主義に限られる事の愚を知りぬいてゐた。

永遠に流動する自由の眞内容こそ彼等の盡きない求めであつた。實際長い間の歷史に於て或信徒が主義の態度に彼の信仰と理論とを托したかも知れない。然し之は眞の宗乘に活きるものゝ主旨ではなかつた。神秘主義とは只便宜の爲に人々から選ばれた習慣的用語であつて、字句は何等その内容を指示するものではない。禪宗と云ひ禪學と云ふも亦此不幸な例に洩れない、宗教はいつも言葉を越える。言葉は屢々誤解の發端である。

直下の衝動によつて、神（卽如）との親交を内なる心に經驗するのが神秘道の本旨である。多くの神秘家が吾々に示現し得た永遠の眞理は、心に輝く「内なる光」'Light Within' であつた。此信念によつて二重の可能が吾々に示されてある。一つには人間に賦與せられた神性の是認、二には之によつて可能である人間と神との親交である。一葉の地に落ちるすら嘗て攝理を離れてゐない、況んや人間の創造は神が勞ひの印である。之こそは罪に傷く吾々の心すら、神との

直接な親交を受け得る實の證明である。次の驚く可き言表は神秘を知る者のモットーであつた。

'God becomes as we are, that we may be as He is.'—Blake

彼等は波打つ皷動を以て內なる心に輝く神を見つめてゐる。有限の身にも無限への連鎖がある。此事實は完全に示現せられねばならぬ。この切實な神の體認こそ彼等が味ひ得た久遠の法悅である。信仰の歸趣、宗教の精華が只此うちにのみ潛むのを彼等は堅く信じてゐた。之をおいて他に認め得べき信仰の意味は存在しない。神によつて許された神との親交、人生の至極は此永遠な瞬時に包まれてゐる。抑へ得ない求めに應じて彼等が切に迫つたものは此最後の直接な體驗である。彼等は此根本事にのみ不二不動の宗教があるのを確信した。

然も彼等が宗教の精華に對するかゝる理解は、之を何等の作爲なくして體驗しやうとする要求を產んだ。いつも彼等の心は此人と神との卽接に向つて急で

ある。純に信仰を此內に集め、又唯一なる宗教を此內に建てようとしたのが彼等の企である。生命の本核に直下に觸れ得たい此希願に對しては、精密な信仰の階梯は寧ろ迂遠である。吾々は宗教の純一を信じる。果さるべき宗教の歸結は簡明である筈である、之に加へられるあらゆる考想は純一の相を錯雜に現すに過ぎない。ものはその周圍に學說を集める、然し吾等の心には思辯よりもその核に直に入らうとする要求がある。凡ての面帛を脫いで赤裸々な眞諦に觸れ得たい心がある。千萬の敎義の疏註よりも一體得にこそ宗敎の閃きがある。是等神との直接な親交、至純なる經驗を心とするのが神秘道の意味である。

必然宗敎は眞に吾が身に關はる宗敎であらねばならぬ。吾が內心に關はり得ない一切の外事は、生命にとつては旣に二次である。玆に宗敎は個性に密接する。果されねばならぬ一事は與へられた個性の表現である。かくて宗敎は內なる宗敎である。內面の意味をおいては凡ての敎條も形式も又救主すらも唯の空

名に過ぎない。流派は單にその形骸であつてその精華ではない。欲するものは內に味ふ價値である、外を飾る名目ではない。宗教は內心の宗教であつて流派の宗教ではない。此直接な個性の內的宗教が神秘道の宗教である。

主義は言說と運命を始終する。理論は變換し得べき理論に過ぎぬ。如何なる思辯をも許し得ない不二の信仰は、その基礎を移動すべき主義の上におく事は出來ぬ。主張は限界である、あらゆる流派は一個の規定であり制限である。宗派は必然反目を內意する。あらゆる主張は之れに對立するものに向つての態度である。畢竟主義は相對の業を出る事がない。それは何等自律の內容たる事が出來ず、唯批判し得べき對象たるに終つてゐる。吾等が欲するものは一切の判斷をすら許さぬ規範的事實そのものである。既に如何なる拮抗をも許さない自律の體驗でこそ絕對である。宗教の根柢は只此一事にのみ安在する。教條は只後に附加せられた形式である。若しも宗教が或る特殊な神學によつて決定せられ

るなら、それは心の桎梏であつても開放にはならぬ。宗教は束縛すべき爲の宗教ではない。それが一定の形式に沈溺する時信仰には只枯凋がある。神學は理論として主義を要求する、然し宗教は歸趣として主義の離脫を喚求する。知識は畢竟差別を與へても、綜合を離れてゐる。ものを未分に理解する時のみ眞理の體得がある。主義は分別であり相對である。宗教は自ら永久を追ひ、內面につき、根本に歸る心の求めである。何事よりも此精華をと追ひ慕ふ時、彼は正しく神秘道に步みつゝあるのである。

宗教は眞に離言の道である。それは凡ての言語を絕する。卽如は定義せらるゝを許さぬ。斷定はものゝ內容を局定する、無限の自由であるべき絕對の面目は之によつて表示し得べくもない。凡ての批判反省は此渾一の態を分析して平面に齎す差別知に過ぎぬ。凡ての差別を絕する時にのみ彼に完全な自由がある。一切の形式、一切の主義は寧ろ自由の拘束である。

自由に卽する心が彼等の心である。此心の切な事に於て神秘家は人々の要求を越える。神學は宗教への辯疏であらうが、活きた宗教そのものは辯疏を脚下に踏んでゐる。神秘經驗は言說の堡壘に依據するのではない。知識は吾々を美はしく裝飾する、然しそれは靈の量ではない。嘗てパスカルが云た樣に宗教は「心」の事に屬する。權威は內に湧くのであつて外に在るのではない。

彼等は嚴かな靈の示現の前に、一切の敎條、儀式、聖典をすら第二次とする。是等各々の價値を忘れるのではない。只かゝる事にのみ拘束せられる時、宗教の眞諦が失はれるのをより明に知つてゐる。神秘道は長〳〵院制主義 Institution-alism に止る事は出來ぬ。彼等は之によつて規定と院制とを卑下し去らうとするのではない。只彼等はより直接な宗教的內容に憧れてゐる。正統派に所屬する凡ての信徒、又時として純な學者すらも敎會歸依 Churchmanship を以て信徒の本旨とさへ見做してゐる。彼等にとつては敎會員 Churchman たる事が宗教

家たる所以である。然し敎會は神の國を示現すべき途程ではあつても、信仰は之に終末すべきではない。吾々は敎會を否定すべき理由を知らないが、敎會に束せられる理由を更に知らない。敎會は目的に達すべき一つの方便ではあつても、吾々の目的そのものとはならぬ。吾々內心の要求は一層直接的である。何が故に目的そのものを直に捕へる事が許されないであらう。神秘道とはたえずかゝる要求に迫つた一脈の流れである。

批評家は之が爲に屢々此道を目し反歷史主義と呼んでゐる。內心直下の體驗を宗教の本質とする者にとつて傳統と歷史とが旣に第二次であるのは云ふ迄もない。然し是等の態度を反の字によつて示さうとするのは誤解である、自由を欲する彼等にとつては反歷史主義も又一個の束縛である、一切の拘束を絕して眞に自由なる面目に活きる時、永遠の宗教が示現せられるのを彼等は信じてゐる。歷史に沈み、歷史に反するのは共に彼等の滿足し得ない態度である。彼等

は一切の條件を絶して宗教の核に急がうとするのである。神秘家にとつて彼と神との間には何の介在すべきものがない。

外圍よりも内なる光を慕つた是等の態度を、宗教の枯凋に對する單な反抗的氣運としてのみ認めようとする學者がある。彼等は此思潮が信仰を覺醒した數々の例を忘れはしない、然し是を異例な發現として宗教の精華が別個にある事を稱へてゐる。もとより變態は正當な宗教を伴ひ難い、然し神秘とは果して異變の態であらうか、果して此氣運は反抗をその心としたであらうか。是等の批評は只不足な理解を告げるに過ぎない。余は自然を示すが故にこそ神秘を愛するが、その變態の爲に之を辯じるのではない。

神秘道は人爲の所産ではない、嚴然とした必然の事實である。神秘家は生れ乍らの内なる光に發した事に於てのみ神秘家である。彼等の安かな信念は與へられた人間そのものゝ本質に潜んでゐる。神秘とは此自然なものゝ別名であ

る。彼れが生れ乍らの本性に活きる時人は自ら神秘家である。神秘道はものを有りの儘に見ようとする態度である。あらゆる人爲を脱して事相をその本來の意味に於て理解しようとする道である。如々な本然な面目に於て眞諦を抱かうとするのがその心である。神秘道は自由道である。それは一切を開放する、人間そのものゝ自由を復生する。否一切のものにかゝる自由の活機を認めるのがその至悦である。凡ての束縛は先づ離脱せられねばならぬ。人工の作爲に傷つく時彼等は人間を離れ神を離れ、宗教を失ふのである、神秘道の永遠な基礎は主義の上に建つのではない、人間そのものゝ内に安在する。

彼等の必然な經驗がよく永久であり普遍であるのは只此與へられた本然の表現によるからである。人間そのものに立つ事に於て彼等の經驗は眞に人間の共有の財産である。神秘道はその個性の直下なる經驗に於て宗教の精華を示し、人間に立脚する事に於てあらゆる宗教の神秘道である。此二重の眞理は吾々に

何を語るであらうか。

若しも神との直接な親交が宗乘の歸趣であるならば、神秘道はかゝる歸趣である。それが如何なる形式をとるにせよ、此事實に於て一切の宗教的經驗は神秘的經驗である。然も共有の宗教が此道に見出され得べき悅びを吾々は持つてゐる。人間本性の要求に基く事に於て、神秘道はあらゆる宗教の共產である。それは一宗一派にのみ許された神の惠みではない。彼等は人間に活きる公有神秘家であつて宗派に限られた專有神秘家ではない。人々は此共有の宗教を理解する事によつて一切の宗教に敬念を抱く事が出來る。多くの信徒は自己の宗派を固守する事によつて排他の醜さから脫れ得ないのである。何故凡ての宗教を貫通して流れる共有の至寶を愛し得ないであらう。神秘道はあらゆる宗派を一つに結ばしめる。救ひの專有は基教にのみ許されるのではない。神は基教的であると共に佛教的である。眞理は常に回教的であり、儒教的である。余は正當

な凡ての宗教はその根底に於て調和さるべきものと思ふ。爭論は理解の不足に過ぎぬ。

神秘道は主張ではなく傾向である。理論ではなく氣質である。組織たるよりも開放である。思想たるよりも精神である。定義たるよりも暗示である。規矩たるよりも創造である。形式たるよりも流動である。彼等の危期は神秘道を主義に托す時にある。理論が生命の位置を奪ふ時、宗教は言葉の宗教に死滅する。偉大な宗教家は凡て言葉を謹んでゐる。彼等には沈默が最良の言語であつた。かの圜悟の「碧巖集」が廣く愛された時、嗣子の大慧宗杲は之を凡て燒きすてゝ了つた。この大膽な努力は言辭に基く宗教の絕滅を志したからである。

一般の理論を旨とするよりも、特殊な個性の求めに起つ此宗教は、必然その方向に於て多面である。神秘道の多樣は個性の氣質に基くのであつて主張の分岐ではない。如何なる神秘家も他の神秘家によつて一つの拘束をすら受けな

い。彼等は彼等自身に於ての神秘家である。時として彼等の道は冥想的であり又情的である。如何なる道も彼等の各々を妨げない。彼等は自身に於て自由であり自他の關係に於て自由である。神秘道に於ては彼等は各々の個性を實現する。かゝる實現に於てのみ相互の理解がある事を知つてゐる。彼等は彼等自身の內部生命の樹立者である。人間そのものゝ宗敎として彼等はいつも宗團を越える、人間は宗團よりも根本的であり、內容は遙かに廣汎である。

實際神秘家が或時代に一團をなして起つてきた事は事實である。例へば十四世紀に獨逸に榮えた「神の友」、又は英國に起つた「クェーカー」宗の如きはその實例であらう。然し彼等は何等宗派に自己を防備したのではない。嚴然たる個性の要求に出發した信徒である。同じ求めに活きた彼等は互を愛し互に集ひ合つた。然しそれは黨派を夢みたのではない。彼等の道を流派の名によつて呼ぶのは誤りである。主義からの離脫をこそ彼等は希つてゐた。おのづから集つた

彼等は流派の名を避けて自らの群れを「友」と呼び「會」と云つた。「神の友」'Friend of God'「友の會」'Society of Friends'「愛の家庭」'Family of Love' とは彼等の好んだ名であつた。實際神秘家の一團に名づけられた宗派の名目は彼等よりも他人によつて名づけられた侮蔑の稱號であつた。クェーカー Quaker とは神の前に「慄く」人々である。或者は誹りを以て彼等を所謂「神靈家」Spirituaristsと呼び、「探索者」Seekers と呼び又は誇言者 Ranters と呼んだ。かの回敎の神秘道をスフイズム Sufism と云ふも、それは何等 ism の道ではない、「毛皮」を纏ふ人々との意である。

神秘道が一個の宗派でない事を主張する時、批評家は禪宗、又はクェーカー宗を指摘するかも知れない。實際偉大な系統をさへ引いて今日に續く禪宗の如きものを此例に悖ると見做すかも知れない、然し眞の禪者が繰り返し〳〵云つた主旨は禪に差別知を認めない意味であつた。何人か呼んで禪宗と云ひ禪學と云

つたかを知らないが、それは單に名づけられた稱號に過ぎぬ。禪に於て派流、學知は許す可きでない。禪は只一字禪に於て既にあり餘るのである。出來得るなら彼等は禪の一字さへ用ゐたくないであらう。禪の五家分立も何等根本の分岐ではない、只異る人格の表示であつて、寧ろ禪が如何なる樣態にも現はれ得べき自由の裏書である。人々がその性に基いて平等の眞諦を見守るに過ぎぬ。名目は何等充全に內容を語るものではない。禪は自ら標榜する通り不立文字直指人心である。彼等は說くを許さぬ絕對事を自ら持つてゐる。「無」と云ふのも只這般の消息の反映である。

かのフォックス Fox によつて創設されたクェーカー宗 Quakerism も一個の宗派の形に終るものと評すかも知れぬ。然しそれは只沈默の法悅を知るものゝ一團である。その敎へこそはあらゆる形式に反抗して、ひとへに「內なる光」を求めようとする態度である。彼等は流派に自らを圍む宗團ではない。その心を愛し

つた「友の會」'Society of Friends' である。主義は分離の豫想である。何ものが流派の許に永續するであらう、只活きるものはかゝる說議を絕した內心直下の經驗である、宗敎は只此根に榮えてのみ花に飾られるのである。かの神秘道とはその語義に於て口を塞ぎ眼を被ふの謂である。

（一九一七年八月稿）

哲學に於けるテムペラメント

I charge that there be no theory or school
founded out of me,
I charge you to leave all free as I have left all free.

From '*Myself and Mine*'—Whitman

哲學に於けるテムペラメント

此小篇で明かにしようとする論旨は、寧ろ簡易な常識的批判の範圍を出ない。然し多くの批評家は屢〻之を看過して空しい論爭の痴愚を重ねてゐる。自分は玆に哲學上(若しくは一般思考上)の論理的立論(Logical Argument)と、哲學者(若しくは一般思想家)の個人的テムペラメント(Individual Temperament)との關係を論じようと思ふのである。內容は思想態度の問題に終つてゐるが、然も哲學の價値に就て、一つの見方を開き得た事をひそかに信じてゐる。

一

一般の信念に從へば、理知を主として立つ哲學は徹底して論理的正確を必要とする。吾々が哲學的立論を行ふ時は、必ずその知的思考に數學的精緻を加へて、明確に理性の活動を階段的秩序に開展しなければならない。さうしてその立論はいつも客觀性と普遍性と必然性とを具へた冷靜な理論的斷案に終らねばならない。然も種々の思考はそれ自らに一つの體制的排列を要求する。故に哲學的思考の理想は、その思想內容を一般的圖形に構成する事にある。一言で云へば哲學的體系(Philosophical System)の組成にある。

偉大な哲學者と云ふ名譽は、いつも廣汎な體系を持つ哲學者の頭上におかれてゐる。體系の壯大は直ちにその哲學の雄大と、その哲學者の偉大とを聯想させる。從つて哲學に對する人々の尊敬と信賴とは、殆ど彼等の立論に潛んでゐる論理的正確性の上にある。かゝる思想の習性から、吾々は一切の哲學(若しくは廣く一般思想)の價値を、殆どそこに包まれる論理的客觀性の多寡によつて評

價しようとする。一般的妥當性に乏しく、客觀的に非論理的であり、且つ何等の體制的系統をも缺く哲學は、直ちにその思索の不正確と幼稚とを豫想させる。故に一切の思想內容は殆ど論理的一般性を標準として批評され評價される。若しもその哲學的思想の結論が、客觀的一般的內容に乏しい時、人々はその立論の哲學的價値を卑下する事に決して躊躇しないでゐる。

從つて哲學的思索併びにその批評の方向は、凡て論理的正確性に向つて集注される。その見解の一致も反目も凡て之を焦點としてその周圍に廻轉する。かくて哲學的論爭は、いつもその思考の結論が論理的に眞であるか否かの問題に終つてゐる。實に眞理を愛する爲に立つた哲學者は、眞理を得る爲の論理の爭ひに身を浸してゐる。不幸にも哲學ほど反目と爭鬪とに充ちた歷史を持つものはない。議論は議論を重ねて吾々は止まる術を知らない。幾百代の祖先が今日吾々に殘した賜物は、歸決する事が出來ない問題の無數を、數へ盡し得ない程の

多くの書籍に記載した事實である。かの科學の樣に夥しい資料か幾つかの單純な法則に節約されて、それが永遠の眞理として承認されるのに反して、哲學は殆ど論理の戰場に傷ついて、永遠の眞理を示して長い捷利の誇りを得る者は殆ど稀と云はねばならない。

かのターレスが紀元前六百年の昔に、水を以て此宇宙の原質とした時代から、二千有餘年後の今日、流動を以て自然人生の本質を說かうとするベルグソンの哲學に至る迄、哲學的論爭は宛ら永遠の波動に終る海水の宿命にも比較し得られる。汀に立つて止む事ない彼等動亂の反復を、人々は寂しみの心を抱いて見つめてゐる。いつの時に吾々は平穩な眞理の靈水に浴し得るであらうか。明確な論理的立論は却て不明な渾沌の世界をのみ與へる樣にさへ考へられる。

然も今は哲學的不安の時代である。啻に吾々は反目する多くの哲學的立論の雜然たる排列を前に見るばかりでなく、實證を慕ふ吾々の心は科學の力を忘れ

る事は出來ない。二千年を經由した今日の哲學史が吾々に供給するものは、科學が吾々に示した確乎とした法則の如きものではない。一切の結論は寧ろ一般性を缺いで、彼は永遠の客觀的眞理を今尙示し得ないでゐる。寧ろ吾々は永劫の安住を哲學に見出す事が許されない事實である事を知るばかりである。人々は漸く哲學を離れ科學に一切の說明を求めようとあせつてゐる。さうして今は科學に對する信賴の時代に遷つてゐる。

然し是等の訴へは果して正しいものであらうか、然も人々が疑ふ樣に哲學はその存在の意義を棄てゝ科學にその務を讓らねばならないのであらうか。自分は哲學に對する是等の見方が謬見に基く事を明かにする事によつて、哲學の使命に新しい價値を甦らしたいと思ふのである。玆には少くとも從來の見方に對して三つの疑問を挿む事が出來る。果して哲學本來の要求は、客觀的眞理の論理的獲得にあるのであらうか。是は自分が提供する疑問の第一である。第二に

吾々は哲學的思索の價値を直ちにその論理的內容の價値に還元する事が出來るのであらうか。第三に哲學に恒久の生命を與へるものは只その立論の論理的正確性のみであらうか。

實際論理的正確性が哲學的思考に重大な價値を與へる事は否み得ない事實である。然しかゝる論理的意義が如何なる點迄哲學の內容を形造るのであらうか。自分は此問題に對して明かな答を與へる事によつて、玆に哲學の價値に新しい光明を見出したいと思ふのである。

二

在來の期待によれば、人々は哲學の恒久性をその結論の論理的價値に求めようとしてゐる。論理的價値とはいつもその內容が必然的であり一般的であり且

つ客觀的眞理を示す事を豫想させる。主觀的斷案に充ちて只特殊な獨斷に止まるものは、いつも避け難い論理的誤謬に終らねばならない。論理的正確性はいつも其立論の價値內容を左右する力がある。然し吾々の想像がよく許し得る樣に、一定の規則と約束との許に成立する明晰な論理的思考が、二個の離反する內容に逢着する時、その眞僞正邪を判明する爲には、しかく多くの困難を感じないわけである。一と一との加がいつも二であると云ふ事を思考の法則が示す樣に、論理にとつて二者の是非を決定する事は寧ろ簡易な事の樣に思はれる。然し理性に基く冷靜な立論を標旨する哲學的思考の論理性が、今尙判明な客觀的斷案を下す事の少ないのは、寧ろ不思議な事實と云はねばならない。想ふに哲學的內容の凡てが論理的價値に終るべきものであるなら、哲學的眞理は、既にアリストートルの時代に終つてゐたかも知れない。何故なら吾々は思考の働きに對して、一定の破る事の出來ない法則を持つてゐるからである。從つて純に論

理的に思考を進めるなら哲學の統一は寧ろ容易な樣に考へられる。然し何が故か凡ての人は、今尙各々異つた哲學を持たうとしてゐる。

いつも論理は哲學に一定の客觀的眞理を下す事を命ずる。然し哲學者は各々の主觀的立論を固持して、それに客觀的價値を見出さうとする。吾々は何の素因が明晰であるべき哲學的眞理に、錯雜と混亂とを與へてゐるかを見ねばならない。哲學的動亂に對して不安を抱く吾々はその素因を見出す時、哲學に新しい容色を見出す事を禁じ得ないのである。

哲學が古來二つの對峙する學說にたえず充たされてゐる事は何人も知つてゐる。一元論と二元論と、觀念論と實在論と、唯心論と唯物論と、經驗論と主知論と、機械論と目的論と、絕對論と相對論と、かゝる相反の原理は實に哲學史をあむ經緯の絲になつてゐる。理性に立つ人間の理知が、然も靜淡を旨とする哲學的思索が、更に又一定の論理を持つ吾々の批判力が、かゝる反對の思想を送り迎

へるのは寧ろ奇異な現象と云はねばならない。何が故に是非眞僞の判斷に起る哲學が、かゝる愚昧を長く重ねてゐるのであらうか。極は極を拒み、表は裏に背き、右は左を離れようとする。谿が永へに山を豫件とする樣に、哲學はいつも反目の哲學を聯想させる。然し二千年の哲學が爭ひの跡を見守る時、然も亦新しい戰ひの叫びを今自らの唇に擧げようとする時、自分は著しい事實の存在を注意する事が出來る。

若しも思考の論理性が哲學內容の始めであり終りであるならば、哲學が一定の圖形的範疇に安じる爲には、多くの時間を費さない筈である。然し哲學的內容は遂にその思考の論理的內容と同一ではない。吾々の精神的要求が論理の圓周を破り出ようとする憧憬は、人々が思念してゐるよりも幽遠な根柢を持つてゐる。吾々本然の要求は遂に純知的の領域に歸趣の地を見出す事は出來ないでゐる。想ふに人生の內容は限りないものを包むが如くに見える。然も個性は各

々無窮な擴張と充實とを得ようとあせつてゐる。人は有限の身に生れ乍ら、無限を追ひ求める樣に造られてゐる。然も凡ての人はその各個の存在に永遠の是認肯定を與へねば止まないでゐる。實に人生第一次の原理は、凡ての人がその各個の存在を否定し得ない事實である。凡ての哲學的思想の分離と錯雜とは、それが哲學者各個性の要求に動かし得ない基礎をおいてゐるからである。一般的原理に立つ論理は少くとも一定の客觀的形式を得ようとする。然し特殊的原理に立つ個性は自己の特性を通じて此自然人生に觸れようとする。前者は一樣を後者は多樣を要求する。いつも哲學的主張の反目は此二つのものゝ接觸から起る。哲學の一般的統一は論理の理想である。然も個性の存在は王冠を自らの頭上におかうとする。彼は客觀的歸一を、是は主觀的統制を企圖する。實に純粹論理は一切の主觀性を排除して客觀的眞理を與へようとする。然し個性の偉大な抱負は主觀的眞理に一切の客觀的價値をおかうとするにある。一般的約束

は個性の堪え得る所ではない。彼は凡ての論理的規則を包含して、然も尙飽きる事を知らず自由な翼を翱つて無限に高遠なものを追ひ慕つてゆく。拭ひ得ない一事實は人生の內容が一般的論理的內容を遙かに越えてゐる事である。

かくして哲學の論爭は實に哲學そのものゝ本質をさへ示現する。一切の反目はその基礎を幽玄な人生內容の事實においてゐるのである。只一般的客觀的眞理に凡ての信賴をおかうとする人々は、その不統一を嘲つて遂に哲學の價値を否認しようとする。然し新たな是認は此不可思議な事實に底深く宿つてゐる。人々が哲學に向つて訴へる不信任の第一の誤謬は、哲學を只純粹に靜的な理性批判と見なして、その價値の凡てを思考の論理的內容に移さうとする處にある。哲學的思索を衝動して哲學に動因を與へその方向を定めるものは果して何の力によるのであらうか。然もその哲學に價値と權威とを與へるものは何の力であらうか。前にも云つた樣に、一般の思想によれば哲學は冷靜な理知を出發とし

て、吾々に純粋な客觀的眞理を與へるものとされてゐる。從つて哲學の價値も權威も、凡て思考の論理的內容から起るものとして、そこに信賴の凡てをおかうとしてゐるのである。然し多少の反省によつて知り得る樣に、偉大な哲學は寧ろ動的起因を深く內在して、個性の抑へ難い特質をその背後に潛めてゐる。事實が告げる明瞭な眞理は、哲學者各個性の特質、卽ち彼等のテムペラメント（氣質）が、凡ての哲學的思索を衝動して、その方向を決定する基本的動因となつてゐるのである。

哲學の第一次的基礎は哲學者の個人的テムペラメントであると自分は認めてゐる。吾々は決して自己を離れて、抽象的客觀的眞理を得るが爲に思索するのではない。又個性の特質に何等の關與をも持たない一般的普遍的原理を見出さうと企てゝゐるのでもない。又その思想の方向は冷靜な純知の働きが決定し命令するのでもない。凡ての哲學的思索は盡きない具像的テムペラメントを源泉

として湧き溢れてくるのである。吾々は論理的に先づ理性を以て最後の心的活動とみなす故に合理主義(Rationalism)を主張するのではない。かゝる抽象的判斷に先つて、理性を重んじる具象的テムペラメントがかゝる學說を要求するのである。吾々は學理的に實際的效果を最も緊要な事實とするが故に、實際主義(Pragmatism)を唱導するのではない。實際的經驗を慕ふ動かし難いテムペラメントの衝動が、かゝる哲學を人々の口に叫ばしめてゐるのである。かの主知論は獨逸に榮える、その國民は深く理知のテムペラメントを持つからである。經驗論は英國に生ひ立つ、その國民は實際的テムペラメントに優れてゐるからである。吾々にかく思索せよと命じるものは吾々のテムペラメントである。吾々の個性を充す思想の獲得に吾々を動かすものはテムペラメントである。かくて吾々の哲學を歡喜悲哀、一元二元、主知經驗、何れかの方向に決するものも吾々のテムペラメントである。之に從ふ一切の論理的立論は、テムペラメントが

進む足を安定にさせる努力にすぎない。既に方向と性質とはテムペラメントの既決する處であつて、吾々の凡ての理論は、只個人的テムペラメントに偉大な客觀的價値を與へようとする吾々の理知的作動である。哲學は實に單純な抽象的眞理を見出さうとするのではない。各個性の存在に對する偉大な肯定的立言である。哲學の多樣は實に哲學そのもの丶一本質を示すのであつて、引いては各人の個性の要求が各々無限である事を吾々に告げてゐるのである。

然し人々はか丶る事實を喜ぶよりも、個人的テムペラメントの不統一と動搖的性質とに信賴の想ひを棄て丶、只そのうちに見出し得られる僅かな一般的客觀的眞理にのみその哲學の價値を歸さうと求めてゐる。從つて哲學の理想はあらゆる個人的テムペラメントから脫離する事であつて、ひとへに客觀的普遍的原理の獲得に急がうとしてゐる。哲學の價値は漸くその論理的內容の價値に還元されて、本來の資質は失はれようとしてゐる。多くの批評家が抱く一般の趨

勢は、哲學を靜的抽象的學理の一部門と思惟して、然もその見解から起る要求が充たされない今日、更に不安を抱いて哲學の意義をも卑下しようとする。學派の多岐と學說の幽遠とは哲學を一般の人心から隔離さして、科學の力が之にかはつてその位置を占めようとしてゐる。然し哲學を傷けるものは哲學自らでない、彼を葬るのは世の多くの無智な批評家である。彼等は一つには個性に基く哲學本來の深い意義を忘れて、二つには之を單な抽象的學理として只そこにのみ價値を認め、三たびその理論の不統一を悲しんで凡ての信賴を擲ち、四たび實證の學に賴つて凡てを科學の力で說明しようとする。

然し哲學は凡ての批評を越して、その眞意義を發揮する時が來なければならない。棄てられた哲學の生命を甦らして、その價値が新に固く樹立される時が來なくてはならない。何が哲學に永遠の生命を與へ、何が哲學に新しい權威を生むのであらうか。自分は人々と共に立論の論理的內容の價値を是認すると共

に、人々に反して更に尙テムペラメントを愛し、そこに哲學が根本の力を得る事を明かにしなければならない。

三

どんな抽象的概念に哲學を築いても、そこには何等かのテムペラメントが潛んでゐる。テムペラメントが立論の方向と內容とを衝動する力だからである。哲學上範疇の問題は至難な事に屬する。然し此把捉する事に困難な範疇の內容若しくはその數は、理知よりもテムペラメントが定めたのである。實に人々の個性の要求によつてその性質は變りその數は增減しその名目も變更する。何處に客觀的な範疇の數があるであらう。特殊な個性の要求がその數を定めるのである。哲學の組織もその體系も只理論が定めるのではない。ヘーゲルとベルグ

ソンの哲學の相違は彼等のテムペラメントの相違である。

自己をおいて哲學には一切の出發がない。個性の深い衝動によつて、自己の存在に偉大な知的肯定を建設しようとする企ては、哲學眞性の抱負である。個性を經由する事なしに、吾々は何等の明晰な人生觀世界觀を畫く事は出來ぬ。自己を離れ自己の要求をおいて、哲學は何等の力をも齎らさない。彼にとつてあらゆる特殊性を排除する客觀的態度は許されない事實である。個性は哲學にとつて永へに絕える事のない神前の燈火である。燃える焰の光によつて彼が四圍は色彩に充ちて、その光景は明確に彼の視線に觸れる。この衝動の燈火がその力と光とに燃え上る時、彼が世界は榮光を四圍に反映する。此個性の光を失ふ時周圍には只暗黑と朦昧とが殘されてくる。その焰の鮮かな色彩こそは彼のテムペラメントである。焰の色に從つて凡ての世界が彩られる樣に、テムペラメントは世界に自己の色彩を投げる。登る旭日の眞紅の色をテムペラメントに

持つ者には、世界は希望の世界にうつる。咏嘆の月光をテムペラメントに持つ者にとつては世界は寂寞の色調に漂ふ。哲學の多岐は、多岐な個性に基く多岐なテムペラメントの彩る處である。個性にひそむ此特質を棄てゝは哲學は何ものをも產み得ない。詮ずるに哲學は個性を充實させるが爲の哲學であつて、個性はそこに無限な實現を得るのである。彼はテムペラメントに出でテムペラメントを充すが爲に理知が企てる莊嚴な肯定的作動である。吾々は自己充實の偉大な抱負と希願とをおいて、哲學に身を浸すの愚を學び得ない。若し吾々の哲學的企圖が具像的要求を離れて、只一般的抽象的理論を追ふなら、殘るものは把捉し得ない空洞の響きであつて、吾々は活きた生命のある何ものをも捕へ得ない。人々の思念する想像を越えて、哲學は實に客觀を主觀により、一般を特殊によつて咀嚼し去らうとするのである。彼は一切の個人的テンペラメントを開展して、そこに論理的立論の客觀的價値を認許させようとするのである。主

觀的價値は常に第一次であつて、その偉大な効力が、遂に客觀的權威を產むものである。一般的眞理とは偉大な主觀的眞理が呼び起す本然の結果であつて、彼は動かし難いテムペラメントにその濫觴を持つのである。

論理は却てテムペラメントの衝動によつて開發される。凡ての偉大な哲學的思想の價値は、それが抽象的一般的な客觀性をおびるが故ではなく、特殊的個性色に彩られた强い理論に基くからである。吾々は決して純粹論理から出發して吾々の思想を構成するのではない。理論はテムペラメントに基く個性の動かし難い事實によつて決定されるのである。眞理は吾々を離れて、吾々の前に排列せられてはゐない。眞理は必ず個性の實際的經驗を通過してのみ現はれてくる。人々は立論に生命を與へるものは論理的內容にあると思つてゐる。然しテムペラメントこそは論理に生命と確實性とを與へてゐるのである。實に何者の力によつても左右し得ない嚴然たるテムペラメントは、それ自身に鞏固な密着

性を持つ永遠の論理的內容を喚起してくる。弱いテムペラメントの傍に決して強い論理的立論は現はれない。況んや只個性を離れて抽象し來つた論理それ自身には何等の力何等の權威をも內在しない。偉大なテムペラメントは凡て個性の實驗を滲透してくるが故に、絕對的確實性をその理論的立言に與へるのである。具像的經驗の事實を持たず又は自己のテムペラメントと合一してゐない理論は一つとして人を動かす力を產まない。一切の哲學的確實性と權威とは、抑制する事の出來ないテムペラメントの本然の叫びから湧き出るのである。實に人々の想像に反して、哲學的立論に恒久性を與へるものは個人的テムペラメントである。何故ならば、個性に基くテムペラメントは何者の前にも屈し得ない事實であつて、然も最も具像的實有の經驗だからである。

かの幾何學が動かし難い公理に基いて凡ての理論を開發する樣に、哲學は動かし難いテムペラメントに基いて一切の思考を開展する。實際的個性色の明瞭

な立論は、哲學を貫く滾々たる流れである。凡ての理論の沃野は、その流水に潤ひを仰いで綠草の衣を着るのである。哲學の美觀は實にそこに內在するテムペラメントの美觀にある。その論理も體系も、莊嚴なテムペラメントの力を內在するが故に偉大なのである。體系は決して單純な論理の理想から造られるものではない。たえず動的な個性の要求を待つて開發するのである。かゝる見方は一般の批評家を悅ばさないかも知れない。然し事實は聊かも自分の言說を破つてはゐない。理論は理論によつて改造し得られる。然しテムペラメントは此世界の何ものによつても打破する事が出來ない。哲學に永遠の威力を與へるものは實に客觀的理論にあるよりも、寧ろ主觀的テムペラメントにあるのである。

倫理學史を繙く時吾々はカントの所謂無上命令（Der kategorische Imperativ）の學說に逢着する。カント以後倫理學の發達は、多くの優秀な學說を產んで今日に及んでゐる。然し自分の經驗に從へば今日の學說としては不滿足な此カン

トの思想程、自分の心を底から動かしたものはない。自分はカントの此言葉を讀む毎に莊嚴な哲學的權威の前に跪かざるを得ない。吾々は理論的にかのグリーン等に基く人格實現の學說が遙かに勝つてゐる事を知つてゐる。然しその權威の偉大に於て自分はカントの精神に崇仰の念をさゝげる事を禁じ得ない。彼の學說は理論として破られる宿命を持つてゐる。然しカントの學說にひそむテムペラメントは、實に久遠の生命を持つて今尙吾々に嚴肅な畏敬の念を起させる。彼が立言の價値は論理的誤謬を持ち乍らも、一切の矛盾を包含して、尙も悠々たる威嚴を以て吾々に臨んで來る。カントの哲學の偉大は單にその立論が論理的精緻を極めてゐる爲ではない、又その哲學が壯大な體系を持つてゐる爲でもない。彼が個性に量り知る事が出來ない深いテムペラメントを宿してゐるからである。彼が哲學の權威も正確も、凡て彼の鮮かなテムペラメントの嚴然たる衝動によつたのである。

吾々は又最も美はしく深いスピノーザの哲學を擇んでくる。此一猶太の哲學者も吾々に無上の敎を垂れてゐる。彼は强い究理心に襲はれて、靜かに嚴そかに思索し追求し、彼が思想に數學的正確を與へるが爲に、その哲學書に幾何學書の形式を摸してゐる。然し彼が偉大は決して此單な數理的探求の事實にあるのではない。彼が偉大は殘りなく彼のテムペラメントにあり、彼が權威は一にその敬虔なテムペラメントにある。彼が心身に關する學說、若しくは本體に關する原理は、今日の鋭い批評から逃れる事は出來ない。然しどうして吾々は此の哲學者に限りない愛慕の情を感せずにゐられよう。吾々は彼の書を通じて彼のゆかしいテムペラメントに手を觸れて、その溫かみに恍惚たる情趣を味識する事が出來る。ノヴァリスが云つた此「神に醉つた哲學者」は實に人類の貴寶である。若しも哲學一切の價値がその純知的論理內容に還元されるならば、スピノーザは過ぎたスピノーザである。然し彼は今尙吾々の傍にあり、今尙吾々の心

に限りない法悦を與へてゐる。理論は過ぎゆく、然しテムペラメントは永在する。此事實こそは吾々に深い福祉を與へてゐる。

吾々は哲學史上どんな哲學を擇んでも、それが偉大なテムペラメントに基く時は、どんな非論理的、非實證的理論にも、尙絶大の價値を見出す事が出來る。何故ならその哲學に潛む靈の要求は、その哲學が與へる實證的論理より遙かに偉大であり神秘であるからである。近い時代に於て自分は其實例としてフェッヒナーを好んで擇びたい。

かの無心に想はれる花にも、かの無生に想はれる星にも、凡て精神の存在を認めた詩的世界觀が、嚴密な科學的方法を好んだフェッヒナーの思想である事は、一見して矛盾の樣にさへ思はれる。見るが如くに書いてある彼の「死後の生活」は、冷やかな理知に生きるものには單な空想とより想はれない。然し客觀的に論理の正確を缺く彼の世界觀は、哲學として吾々に何等の價値をも權威をも持

たないであらうか。テムペラメントの意義の省みられない今日の哲學界にとつて、彼の世界觀は實に花の如く星の如く吾々の前に輝いてゐる。フェッヒナーは古今を通じて最も偉大なテムペラメントを持つた哲學者の一人だからである。想ふに彼の思想がいつか科學者の間にも是認せられる事は自分のひそかに信じてゐる處である。理論的構成はいつか改造される日が來るかも知れない。然し一切の彼の思想は悠然として彼がテムペラメントの上に安住の床を得てゐるのである。單純な理論は決して彼の平安を亂す力がない。

茲に吾々はテムペラメントの內容が、哲學的權威の起源そのものである事を想はざるを得ない。吾々が威力の前に跪く時、又は權威を以て吾々自らが臨む時、そこにはテムペラメントの具像的動力が肅然として吾々を襲ひ吾々を熱してゐるのである。哲學は實に個性色の鮮かな起源を持つものと云はねばならぬ。

四

人生の內容は常に論理の內容を越へる。論理が吾々に旣定的眞理を示さうとする時、人生は吾々に創造的眞理を與へてゐる。生命の活動が旣約的機械的行動に終らない限り、論理的內容は又生命の衝動と共に開發される。さうして人生に關與する眞理は進化的發展を容れる如くに見える。

若しも此宇宙の凡ての事項が、物質の世界に見られる樣な機械的制約に成立してゐるなら、凡ての自然人生に關する眞理は固定的な宿命を受ける。科學者の功績による自然法は、多くの實在論者が主張する樣に完全な客觀的固定的眞理であつて、その法則を亂す事は吾々には許されてゐない。過去現在未來を通じて科學的眞理は常に同一の內容と意味とを持つてゐる。若しも此自然が只科

學者の示す樣な法則の世界であるならば、永遠の生命を持つものは必ず一定の固着的性質を持つ客觀的眞理である。吾々は猥りに其間に主觀的獨斷を入れて、その恒久性を亂す事は出來ない。一切の眞理は決して個人的テムペラメントによつて左右する事は出來ない。凡ては一般的に客觀的に抽象的に決定されてゐるからである。從つて眞理とは只見出さる可きものであつて、造らるべき者ではない。吾々の思索は單に自然に對して受動的位置に終るのである。機械論が主張する樣に、吾々は決して法則の世界に對して自由の活動を營み得ない。個性とは偶然的存在であつて、何等特殊な意味を持つてはゐない。一切の運命は客觀的に機械的に約束的に固定されてゐるとせねばならない。

然し此自然は科學が示す樣な法則の世界に限られてはゐない。生命の世界に吾々が觸れる時、凡てのかゝる形式は打破されて、そこには自由と創造との世界が現はれてくる。彼等の活動はたえず約束の世界を越へて、自由に向上し前進

しようとする。一切の作動は個性を經由して自己の世界を創造しようとする、生命の世界とはいつも創造の世界を意味してゐる。從つて彼には靜的停止がない、たえず進化し運動し改造する。一定の規定に安堵するには、彼の要求は餘りに限りなく、彼の憧憬は餘りに高遠である。彼の作動はたえず自由と發展とに榮える。創造的進化は生命の實質であつて深い根柢を人生そのものに潜めてゐる。

從つて吾々は法則の世界に「見出さるべき眞理」を持つのみならず、生命の世界に於て「創らるべき眞理」を持つてゐる。吾々の個性にとつて此事實より悅ばしい福祉を贈るものはない。凡ての偉大な哲學者宗教家藝術家の事業は、凡て創造の名譽を持つてゐるのである。若しも此世界が計畫された圖形であつて、一切の事項が只機械的關係に止るならば、吾々の希望の運命は悲哀の宿命に終らねばならない。然し個性は幸にも其裡に創造的自由の力を深く內在して

ゐる。

是等の立論が容易に吾々を導く樣に、吾々は今二つの明かな事實に逢着して、ゐる。第一は一切の創造的活動が必ず個性を經由する事であり、第二は個性の發展と共に眞理が創造的發展を容れる事實である。

眞理とは凡ての主觀的特殊性を排除した純客觀的一般性をその內容とする樣に思はれてゐる。彼は先づ凡ての個性的關係を脫離しなければならない。自分は眞理が常に客觀的權威を必要とする事を否まうとはしない。然し凡ての人生に關する知識は、個性の內容に密接な關係を持つ事を明かにしたいのである。云ひ換へれば偉大な眞理とは、いつも偉大な個性の實經驗によつて獲得されたのである。個性の內容をおいて如何なる眞理を吾々は捕へ得るのであらうか。一切の人生に關する眞理は嘗ては經驗であつた。眞理の眞の理解は只思惟の力、悟性の作動によつてのみ得るものでは決してない。體得された眞理のみ永

遠である。眞理を語り得る者は、只その創造者のみである。抽象的思惟は只その概念的記載を與へるに過ぎない。眞理は吾々を離れて決して吾々の前に羅列されてゐるのではない。凡ては個性の泉から湧き、内より外に溢れるのである。眞理を宿すものは個性であつて、個性の表現が直ちに眞理の創造である。偉大な眞理は決して卑しい個性からは生れてこない。眞理は常に天才の創造にかゝる。それが客觀的價値を具有してくるのは、その内に權威ある個性の力が漲つてゐるからである。それは抽象的論理に成立するのではない。眞理はたえず個人的テムペラメントの衝動を受けて表現される。眞理の生命は一つに個性の内容に依つてゐるのである。

思考の過程に關する心理的觀察は、吾々にかゝる事實を供給してゐる。人生の莊嚴な問題に對して吾々が思索し、探求し、眞理を愛慕する情に驅られる時、吾々を動かすものは單純な抽象的知的思考の作用ではない。寧ろ莊嚴な感激

と、無限の渴仰に充ちる情意の衝動である。然も吾々が與へる立論はかゝる個性の内容に始終して開發される。從つて哲學的立論の發展は、個性の創造的表現に伴つてゐる。個性の向上は思索の向上を意味し、思索の向上は眞理の向上を意味する。彼はいつも個性の内容と共に創造進化の性質を帶びてくる。彼は靜的の性質を持たず動的の生命を負つて、たえず個性に作動し、たえず實際的效果を及ぼしてくる。實に眞理は個性の内に建設される。彼は既定的内容を越えて、無限に向上するテムペラメントの内容に一致する。

近世に於て此思想から、一つの哲學を樹立しようと企てたのはプラグマティズム(Pragmatism)であつて、テムペラメントの價値に對する哲學的思想の最も著しい現象である。彼は啻にその主張内容に於てのみならず、近世人心の實際的効果を追ふテムペラメントを背景として立つ哲學である。吾々は彼自身をテムペラメントの哲學とも目し得られる。眞理の内容に自由な進化を肯定して、

その人生に及ぼす實際的効力を第一義とするその主張は、哲學史上に於ける最も大膽な叫びであつて、多くの新しい世界を吾々に提供してゐるのである。此哲學が示す樣に眞理は凡て個性を通過した時始めて價値的事實になつてくる。個性に對する實際的効果を持たない眞理は、吾々にとつて空虛な一個の抽象的概念に過ぎない。彼は個性に作動し始めて生命の力を獲得する。彼はいつも自己と共に働き自己と共に向上する。彼は過去に決定せられてゐるのではない。未來に尙創造的生命を持つてゐる。

實に哲學は既決的眞理の發見ではない、個人的特性の表現である。自己の生命の擴張と充實とに對する無限の努力である。彼はいつも個性の强い色彩によつて、世界を自己の光で被はねばならない。哲學は自然人生に對する自我の表現(Expression)であつて、印象(Impression)の記載ではない。凡ての眞理は只個性によつて存在の價値を具へてくる。詮ずるに個性の存在は凡ての四圍に對し

て第一義的位置にある。永遠的客觀的眞理とは、徹底して個性に忠實な主觀的テムペラメントによる眞理である。卽ち實際的經驗と生命と始終する眞理である。抑も吾々の偉大な抱負は、個性に基く主觀的立論をして、一切の客觀相をおびる迄に自己を擴充さす事にある。自己の擴充はやがて眞理の擴充である。從つて眞理は個性の向上と共に向上し、個性の內容の改變と共に改變される。時として吾々の思想は强烈な意志から出發する。意力ある眞理はそこからにじみ出される。時として吾々の思索は無限の憧憬に充たされる。眞理の內容は情緒に浸つてくる。時として吾々の立言は豫言の叫びを伴なう。日星河嶽の文字はかゝる時に湧き出てくる。咏嘆と渴仰と、悲哀と法悅と、眞理とは凡てかゝる背景を潛めてゐる。彼は決してテムペラメント無くして吾々に與へられない。

もとより主觀的立言は、時として矛盾に被はれ事がある。然しそこに明らかなテムペラメントが宿る時は、常に美しさを止めてゐる。時として高度の憧憬

は、現實の實證から離れてくる。然じそこに鮮かなテムペラメントが潜む限り、尙匿れた神秘を宿してゐる。例へば多くの藝術的感能に襲はれて、美と完全とを追ふ心から此自然人生を見ようとする時、哲學はロマンティシズムの傾向をおびる。彼等の立論は大膽な想像と、幽玄な美想とに包擁されて、吾々に美の世界を示さうとする。純知的立脚地から見れば、そこには何の客觀的若しくは科學的實證もない。然し彼等の思想には驚く程吾々を引きつける力がある。吾々は彼等の廣大な見知らない世界に逢着して、驚嘆の眼を以てそれを見つめてゐる。プラトーンの示す世界はかゝるものであつた。プロティンの說いた世界もかゝるものであつた。ブルーノーもベーメも、近くはシュライエルマッヘルもシェリングも、ロッツエもフェッヒナーも凡て美と完全との世界を吾々の前に殘してゐる。吾々は彼等の思索を通して彼等の人格の前に跪く。吾々は彼等の理論を越えて彼等の偉大なテムペラメントに觸れる。かくて今尙吾々は動かされ吾々の

心の喘ぐのを感じる。あらゆる靜穩な理論を過ぎて、吾々は限りない憧憬に自己の個性を開放する。實に彼等の哲學が只の理論的價値に終つてゐないのは、偉大なテンペラメントに出た哲學だからである。

五

吾々は理論的立論が如何なる基礎をテムペラメントにおいてゐるか、又テムペラメントが如何なる價値を吾々の思索に與へる事が出來るかを見る爲に、茲に純正の哲學を離れて一般の思想界を省みたい。

かの科學的立論に於てすら、テムペラメントは深い關係を持つてゐる。眞理を戀ひ慕ふ異常なテムペラメントによつて、科學者は吾々に樣々な眞理を與へてゐる。先づ如何なる眞理の是認を仰望するかによつて、彼等の理論はその方

向をさへ變へるのである。吾々は生物學上の問題に二つの異說を持つてゐる。一つは機械論であり、一つは生氣論である。彼等は共に夥しい資料を提供して、實驗と理論とによつて自己の學說の眞である事を證明しようする。然し彼等の爭論は決して單純な理論的爭論に終つてゐるのではない。彼等の方向を決定するものは理論にあるよりも寧ろその科學者の持つテムペラメントの衝動である。一つは分析的科學的テムペラメントを持ち、一つは綜合的宗教的テムペラメントを持つ。生氣論者が主張する理論は、觀察と實證とを外にして尙生命の肯定を憧がれ、その價値の無限を知る心から湧いてゐるのである。理論は互に爭ひを積んでゆく。然し彼等の立論の是非を決定するものは、恐らくは抽象的理論ではない。彼等の立言に內在するテムペラメントがいつか最後の審判を行ふにちがひない。人々が機械的世界觀に滿足し得ないで、自由と創造との心に漲る日が來るならば、機械論は遂に否定を受ける。若しも人心が生命の自由な

活動を機械的約束に導く事を喜ぶならば、生氣論はその存在に否定的運命を受けるのである。

ダルキンと並んで記憶されるワレスの著書に「宇宙に於ける人間の位置」(Man's Place in the Universe)と云ふ本がある。今日の天文學からすれば寧ろ突梯とも見られる此學說は、多くの科學者から彼の名譽を毀損するものと評されてゐる。然し吾々は彼の立論に對して尙尊敬の意を抱く事が出來る。人間の價値の無限な事を是認しようとする抑へ難いテムペラメントに驅られて、彼は人間の位置を宇宙に於ける最高の位置においたのである。彼が「ダルキニズム」(Darwinism)の最後の章が一般の進化論と異る事は廣く人の知つてゐる處である。齡九十に達した時彼は最後の生物學的著書「生命の世界」(The World of Life)を公にして彼の樂天的世界觀をその結論に書いてゐる。想ふに彼の理論はいつか改造せられその價値を失ふ時があるかも知れない。然し彼の主旨がいつか人々

の上に捷利を得る事は自分の信じてゐる處である。彼を笑ふ多くの科學者よりも、彼は事實に於て後世に偉大な遺産を殘してゐるのである。（此頁を書きをへてから程なく自分は此大科學者の訃音に接したのである。自分は此偶然な數行が彼の死に對する追悼の言葉としては餘りに短かい事を恐れてゐる。ワレス(Alfred Russell Wallace)は千八百二十二年に生れたのであるから今年九十一歳である）。

更に吾々が一般の思想界に入る時、テムペラメントの色は鮮かさを增してくる。かのトルストイの如きは十九世紀に出た最大なテムペラメントの人である。吾々は純粹理論の立脚地から彼の言說に含まれてゐる謬見を指摘する事が出來る。然し彼のテムペラメントの前には何人も跪かねばならない。彼の立言には時として明かな誤謬がある。然し一つとして偉大でないものはない。彼は彼の誤謬に於ても彼の偉大を保つてゐる。彼が思想は今日の吾々にとつて充分

な滿足に價するものではない。然し彼の人格は模範的光榮を永く歷史に止めてゐる。彼が生涯を通じて奮鬪した不斷の道德的向上に對して、吾々の首は自から下つてくる。彼の傳記を讀む每に、然も彼の晩年と臨終とに夕陽の莊嚴を見る時、自分の眼はいつも涙にぬれてくる。彼が言葉は凡て彼の血から湧いてゐる。彼の容貌は彼の經驗が彫刻した創作である。彼の生涯は個性の表現の偉大な痕跡である、彼が論說は時として極を越えてゐる。然し彼のテムペラメントは明瞭な辨明を彼等に與へてゐる。彼の獅子吼は凡ての彼の理論に密着性を贈つてゐる。彼が說は時として粗野に過ぎてゐる。然し凡て强い權威がある。理論的立言に對してテムペラメントが如何に多くの影響を持つかは、トルストイが吾々に最良の例證を與へてゐる。

ニイチエも亦、彼の思想の危險性によつて多く批評家から退けられてゐる。然し若しも個性を離れた純理論的見地から彼の價値を批判しようとする人があ

るなら、彼はニイチエの價値に就て何事をも知つてゐない事を表白してゐる。然しかゝる時代は早く過ぎなければならない。吾々は彼の幾多の矛盾する思想の背後に實に明確な終始一徹したテムペラメントの偉大を認める事が出來る。彼は神を呪つてゐる、然し彼は最も神を慕つた人の一人である。彼は弱者を卑んでゐる。彼は無限に強者を憧がれてゐたからである。彼の思想には何等の哲學的體系がない。然し個性から湧き出た彼の思想には强大な確實性がある。彼は一つとして輕浮な言葉を放つてはゐない。彼の異常なテムペラメントは彼に敵し難い捷利の力を與へてゐるのである。如何に彼の言葉に誤謬があり撞着があつても、彼のテムペラメントは凡て彼等を包含して、彼等に永への辯明を與へてゐる。只學究に終る哲學者が汲々として客觀的眞理を摸索する時、ニイチエは悠々として自己の理論を千歳に活かしてゐるのである。

人々はよく哲學者としてのメーテルリンクの價値を論じてゐる。然しこれ程

愚昧な批判はない。只知識のみ追ふ人が彼の思想に哲學的精緻を危ぶむ時、メーテルリンクの思想はあらゆる彼等の期待を越えて、悠々たる神秘の衣を纏つて、美と完全との世界を吾々に示してゐる。理論は彼を評價し得よう、然し彼には消し難いテムペラメントの價値がある。若しも彼のテムペラメントを洞察するならば彼の言説乃至彼の戯曲は凡て吾々の愛慕に價する。

茲に又鮮かなテムペラメントの人ストリントベルヒを擧げるならば、吾々は更に明瞭な智識を捕へる事が出來る。此率直な一徹した直觀的思想家は、自己の本然なテムペラメントが命ずるまゝにその生涯を直線的に進めてゐる。彼は此貫徹を妨げるものを殘りなく切りすてゝゐる。彼が思想は一切の複雜を攝取し乍らも、それをストリントベルヒと云ふ單一の焦點に引きつけてゐる。彼は決して自己を離れて一般に通じる平等の思想を稱へなかつた。彼は只自己の個性の特殊性を最高の位置において、全般をそれで併呑しようとした。ストリ

ントベルヒは遂にストリントベルヒを擴充さした。彼のテムペラメントは彼の思想のアルファでありオメガである。若しも客觀的見地から彼を見るならば、彼は只一人のストリントベルヒであつて、殘る萬民は何等彼に關する處がない。然し事實の示す處によれば一個のストリントベルヒは遂に萬民のストリントベルヒである事を失つてゐない。否、彼はよく一個のストリントベルヒに透徹した故に、萬民の個性に接觸し得たのである。吾々は彼の思想に、「人間」の最も深い反映を認める事が出來る。彼が思想は特殊的である。然し凡て確實である。何人の力によつても破壞し得ない固執性を持つてゐる。彼は彼を貫徹さす事によつて時處を征服して永遠の記念碑を人類の思想に殘したのである、彼は高くから人を睥睨してゐる。人は遠く彼を仰いでゐる。かゝる權威の獲得は凡て彼の恐るべきテムペラメントの力である。

テムペラメントが理論に確實性を與へる動因である事を知つた吾々は、テム

ペラメントがよく二個の矛盾した思想をも調和さす事を知らねばならない。ストリントベルヒは女を卑しんでゐる。彼程眞に女を愛した人はないからである。トルストイはベートーヴェンの音樂を批難してゐる。然し彼はその音樂者の曲を聽く毎に涙を流したと云はれてゐる。ニイチエは弱者を卑下して超人の力を讃へてゐる。然し彼の性質は婦女の樣な優しさを止めてゐたと云はれてゐる。イエスは「權威ある者の如くに」人々に語つた。然し彼は神の前に何人よりも謙讓であつた。若しも彼等の言葉が字義通りに解釋せられるなら、彼等は偏屈な例外的主張を殘したに止まつてゐる。多くの世の批評の愚昧は、只かゝる字義的理解の不惑から起つてくる。吾々は彼等のテムペラメントを見る事によつて、奇異に思はれる彼等の思想が實に自然であつて、然も必然的な確實性を持つてゐる事を知るのである。あらゆる彼等の特殊的奇癖は、彼等のテムペラメントによつて永遠の討征と捷利とを得てゐる。理論の是非を決定するものは理

論ではない意力に充ちたテムペラメントである。ホイットマンの詩に

Do I contradict myself?
Very well, then I contradict myself;
I am large—I contain multitude'.

吾々は實にテムペラメントを理解する事によつて又相反する二個の命題をも共に是認する事が出來る。ホイットマンは、自己を讃美する。フランシスは自己を謙遜する。吾々は兩者のテムペラメントを知る事によつて此二個の相反した立言を共に尊ぶ事が出來る。然も吾々は兩者に説明を越えた深い調和がある事を遂に認めざるを得ない、凡ての相反する立論に生命を與へるものはテムペラメントであり、テムペラメントが偉大な時は凡ての相反する立論に調和が現はれる。深遠と生命と權威とを理論に與へるものはテンペラメントの力である。テンペラメントを欠く時は如何なる精緻な立論も凡て空漠であり卑賤

である。理論の勝利は論理的内容によるよりも更にテムペラメントの力に依つてゐる。理論と理論とは勝負を定めない。常に最後の審判はテムペラメントの力にある。

一般の思想界を去つて、藝術の世界に來る時、吾々は更に強くテムペラメントの意味を知る事が出來る。かの畫家もかの詩人も抽象的理論を待つて作畫し作詩するのではない。テムペラメントの動くまゝに直覺を出發として創作する。理論的整頓から始めようとする時、いつも彼等は生氣を失つて、やがては藝術の枯死に終つてくる。彼等の凡ての價値は只一つに彼等本然のテムペラメントに依つてゐる。偉大な作品は凡て必然的であり直感的であり動律的である。彼等は内心の要求の命ずるがまゝに、宛ら流水の自然なるが如くに創造する。彼等はいつもリズミカルである。テムペラメントの流動と共に流動する。

六

二千五百年の昔に世はプラトーを生んでゐる、然し彼は尙今日のプラトーである。彼が哲學は幾千の批評を受けて、哲學は昔日の姿を更へてゐる。然し偉大なテムペラメントの哲學者プラトーは今尙人々の愛慕を受けてゐる。歷史は變遷して彼が母國は瀕死の床に横はつゐる。然し一小島ミローの土中から發掘された一女神の石像が、今尙順禮者の足を引きつけてゐる樣に、彼プラトーの哲學書は今尙人々の崇拜を負つて、吾々の心を動かしてゐる。哲學が深いテムペラメントに基く時、彼は遂に藝術的生命を得てくる。プラトーは實に彼の藝術的思想によつて長への美と力とを吾々に示してゐるのである。

テムペラメントの本然的衝動によつて開發される哲學は、かくて創造的作品の生命を得てくる。哲學は抽象的思索によつて形造られるより自發的直感の衝動によつてゐる。彼は倦まず創造の眞生命に入らうとする。哲學は玆に一個の

藝術的作品である。哲學と藝術と、一つは知により一つは情により兩者は相容れないもの丶如くにさへ思はれてゐる。然し兩者の關係は密に接してゐる。共に個性の要求の自發的表現であつて、一つは眞に對し一つは美に對する情意の無限な追慕によるのである。哲學に藝術的內容の存在を認める時、哲學は又新しい意義と價値とを吾々に示してくる。

哲學は一面に於てそれ自身藝術的所產であると自分は考へてゐる。然も哲學の生命と權威とはテムペラメントから湧き出る藝術的內容によるのであると自分は信じてゐる。藝術は憧憬の心から起る。想ふに愛は藝術の生命である。美を追ふ心は美を愛する心である。かの哲學者が敬虔な心に充ちて、思索し探求し眞理を追ひ求める時、彼等も亦眞を愛する心に充ちてゐる。彼は愛の世界に活きて其悅びと悲しみとを綴らうとする。かくて哲學者は自から藝術的心情に活きてゐる。彼が叫ばうとする眞理は、かれが愛の心の創作である。テムペラ

メントの命じるまゝに、彼が思索の方向を定めて個性の表現を志す時、彼も亦藝術的創造に身を委ねてゐるのである。彼が眞理の世界は彼の美の世界である。彼が抱く世界觀は彼が愛する世界の描寫である。吾々は凡ての深い權威ある思索に藝術的價値を認める事が出來る。今日吾々の心を動かすものは、實に哲學に內在する活きた藝術的力である。若しも哲學が只の究理的內容に止るなら、彼等は決して長い生命を保ち得ない。プラトーもカントも永遠に葬られる過去の產物に過ぎない。然し彼等は優れた藝術的光輝に充ちて今尙吾々の前に立つてゐる。かの古い埃及又は希臘の彫刻が、いさゝかの價値をも落す事なく、吾々の賞讚と感嘆とを今尙集めてゐる如くに。

哲學に藝術的價値を認める時、然も哲學の恒久性はその藝術性にあると見る時、個人的テムペラメントが哲學にとつて如何ばかり重大な役を演じてゐるかゞ分る。然し人は哲學に對してかゝる考へを入れる事を悅んでゐない。寧ろ各

人に異るテムペラメントの存在を厭つて、哲學的思想の不統一をその罪に歸さうとする。彼等に從へば哲學的不幸の凡ては、テムペラメントの多岐とそれに起因する哲學的錯亂とによつてゐる。かくして人々の哲學に對する不安と不信とは、哲學思想の煩鎖と不統一とにあるのである。

然し凡ての人類の生命の活動に一切の統一的歸趣を見出さうとする事は、人間の愚かな夢想に過ぎない。各々の哲學者は決して圖形的一般統一に向つて步を進めてゐるのではない。却て個性の自由な限りない發揮に向つて努力してゐるのである。人は歸一の理想を追ふが、若しも一切のものが歸一せられたならば、人々は個性の存在を滅却させねばならない。吾々にとつて多くの哲學がある事は吾々の安寧を少しも破つてはゐない。試みに哲學が早くアリストートルの時代に統一されたとする。吾々は限りない悲哀に充されるであらう。歷史はカントを產まず、スピノーザを與へず、ヘーゲルを失ひショーペンハウエルを奪

ふのである。然も此自己の存在をも遂に否定せねばならぬ。かくて哲學は未來を失ひ、思想の發展は許されない希ひに止つてくる。そこには何等の開發がなく希望がない。只一切の思索に停止があり反復があるばかりである。反復は吾々の生命にとつて最後の恐怖である。

吾々が今日多くの哲學者と多くの學說とを持つ事は與へられた恩寵である。相反する哲學を持つ事は少しも吾々に悲哀を與へてゐない。レオナルドの繪畫を尊ぶと共にミケランゼロの彫刻を讃へ得る樣に、又シヤバンヌとセザンヌの異る藝術を共に是認し得る樣に、又ブレークの詩が決してホイットマンの詩の存在を妨げない樣に、又凡ての戲曲がシエクスピアーに盡きてゐない事が吾々の幸である樣に、多くの哲學者と多くの學派は啻に吾々にとつて悅であるのみならず、引いては吾々個性の發展の永遠な是認を意味してゐる。吾々はかくて自己のテムペラメントに生ひ立ち、自己のテムペラメントに共鳴する哲學に悅び

の糧を得る事が出來る。哲學の多岐は吾々の自由を肯定し、人類の思想の向上と發展とを促がしてゐる。哲學統一に對する空想は、只吾々に悲哀と死滅との光景を示すばかりである。

然も人々は哲學が究竟の理知的解釋を與へない故を以て、その價値を呪はうとしてゐる。然し吾々を呪ふものは哲學ではなく、かゝる要求である。哲學は一般の爲の哲學ではない、客觀的抽象的一般的究竟の眞理を吾々に與へようとするのが哲學本來の任務ではない。哲學は個性の爲に存在する哲學である。彼は個性の內容を擴大し、充實し、實現するが爲の哲學である。彼は究竟の答を外に待つのではない、絕對の價値的眞理を內から產まうとするのである。彼は無限に向つて個性を延長しようとするのである。人生を一定の形式に納めようとするのではない。

かくて遂に哲學的懷疑は、滿足の糧を與へない事を、人は嘲けるかも知れな

い。然し疑ふ事は、固定的な答を得るよりも、更に自己の世界を擴張する爲である。疑ひは決して失ひではない。よし答を吾々が得ないにしても、人は既に疑ひと云ふ作動を獲得してゐる。吾々は疑ふと云ふ事によつて必ず新しい世界に觸れる。想ふに懷疑は人生の大きな所得である。そこには決して空しい消耗はない、懷疑には常に報酬がある。彼は吾々を衝動し前進せしめる。領土を開放し增大する。懷疑のない安住は人生の停止である。疑問のない所に向上はない、創造はない、自由はない。吾々は憧憬の心に充ち乍ら限りない領土に向つて歩み歩む。必ず何ものかを捕へ得て歩む。疑ふとは既に得るの謂である。

吾々の要求は限りないものを追つてゐる。決定せられた解答に吾々は滿足する術を決して知らない。內心の要求は把捉し難い程の神秘の世界を憧がれてゐる。有限の身を抱き乍ら、吾々は達し得ない極に向つて倦まず歩を進めてゐる。然しかゝる事實は吾々の存在に何等の悲哀をも與へてはゐない。吾々が想像し

得られる最大の寂寥は、吾々の慾望が停止し、吾々の世界に限界がおかれる事である。幸にもアダムの子は無限の野に放たれて、無限の慾望を心に許されてゐる。彼にとつては懊惱は無限である。然し希望も無限である。人生の旅程には蹉跌がある。然し無窮の前進と向上とがある。實に吾々のテムペラメントは一切の束縛を破つて自由の呼吸に活きようとする。無限に志す人生の內容は、一定の論理をも越えてつき進まうとする。永遠の慾求、飽く事を知らない渴仰、限りない世界、一つとして吾々に歡喜を與へないものはない。疑ひ、求め、進み、造る、人生はかくせよと吾々に命じてゐる。かくの如きは眞に莊嚴な無上命令である。

吾々が哲學的要求にかられるのは、個性の確實な充實を憧がれてゐるからである。吾々は無限の慾望を抱いて、動かし難い個性に基くテムペラメントに自分の哲學を建設しなければならない。自己を離れて哲學に生命はない、權威はない。

眞理はいつも自己の經驗にある。哲學は畢竟個性の深い直接經驗の學である。

古句に *Nur was du fühlst, das ist dein Eigenthum.*'

（一九一三年十一月稿）

哲學的至上要求としての實在

哲學的至上要求としての實在

序

之は余の哲學的信仰を披瀝する最初の論文である。

余は哲學の攻究者として何等正統派に屬する者ではない。余の哲學に對する一切の熱情は此學術に對する正統な學歴によつて起つたのではない。余は究理の衝動を殆ど全く藝術及宗教に對する感激から得てゐるのである。余の知識は何等古希臘又は近世獨逸哲學に依存するのではない、余にとつてはルネサンスの巨匠又は和蘭の最大の畫家が一デッサンこそ限りない思想の藏庫であつた。

人々が傍系であると謗つた世々の神秘家の著作にこそ、余にとつて限りない眞理があつた。余は定義せられた哲學よりも、暗示せられた思想に余の心の友を見出したのである。余は幸に自由に呼吸し自由に反省し得たのである。

哲學者としてのかゝる異端的經歷こそは、余の今も尙感じる名譽である。余は余の內心の切實な要求に基く事によつて、學究の冷さから救はれたのである。余は所謂哲學者の運命に屢〻起る醜さから幸な離脫を遂げてゐる。哲學の學者は世に集る。然し彼等と哲學者とは區別されねばならぬ。屢々正統派と自ら呼ぶ宗團が亡び逝く宗敎を傳へる樣に、哲學も正統な形式に沈む時、末期の哀れを示すであらう。

余は哲學に新しい美を甦らしたい心に驅られてゐる。哲學は元來抽象の辭句に終るべきものではない。哲學者は彼の哲學に於て人間の生命に新しい感激を呼び覺まさねばならぬ。余は始め究理的要求から、一切の詩味を抑壓して余の

立論に出來るだけ論理的冷靜を加へようと欲したのである。然しかゝる事は正統派的哲學に沒頭してゐる人々によつて既にあり餘つた方法である。抽象的冷却に終る事は余の內心の要求の堪へ得る所ではない。余は哲學美なるものを是認する。余は余の若年より來る名譽と特權とを無に歸するに忍び得ない。嬰兒は嬰兒たる事を恥ぢてはゐない。余は余の眼前に閃く美の世界に至上の榮譽を感じてゐる。哲學と藝術と宗敎とは三位一體であらねばならぬ。此理想を實現し得る力は只若い哲學者の手にのみ委ねられてゐる。

讀者は此篇が說明よりも斷定的語勢に過ぎるのを指摘するかも知れぬ。然し實在を語る事は既に規範的命令的眞理を語るに外ならぬ。余は特に實在に關する一切の知識は讀者の心を迎へる爲に告げらるべきではないと想ふ。太陽は媚を呈してその光を發してゐるのではない。

一　哲學的實在

知らうとする意志は愛さうとする意志である。眞理に知が飢ゑ渴くのは、眞理に愛の招きがあるからである。知識とは我と物との間に起る理解である。眞理は自己を對象中に見出す時にのみ發現される。此知的要求の歸趣は同時に情意の滿足せられた狀態である。眞理に於て主客は合一し融和する。知の悅びは玆に愛の悅びである。眞に知るとは眞に愛するとの謂である。對象は自己に活き、自己は對象に活きる。永遠の眞理とは常に主觀的事實であり、且又客觀的權威である。特殊性と普遍性とは玆に一體である。

抽象的思想は自からその抽象性に滿足せられるべきものではない。思想の正當な過程は圓周を畫いてゐる。事實を分析する思索は遂にその綜合に歸つてく

る。思惟要求の方法は知である、然しその滿足は愛である。思想は圓環の路程を踏んで內展する。眞理の方向は內にある、彼は外に放棄せられてあるのではない。その求心の力を破る時、思索に冷却と破滅とが加へられる。神の都ジェルーサレムは無限に延長せられた不可測な直線の上にはない。神の都は歸り得べき都であらねばならぬ。

'I give you the end of a golden string
Only wind it into a ball:
It will lead you in at Heaven's gate,
Built in Jerusalem's wall.'—Blake.'

究理の衝動に起つ凡ての哲學的精神は、眞理に內生する時に於てのみ慈愛ある最後の審判を受ける。哲學的知識とはその眞意に於て常に哲學的味識である。Wissen の世界から既に Kennen の世界に還つてゐる。最高の哲學的經驗

は必ず美的恍惚、又は宗教的法悦と等しい狀態を表示する。幽遠な抽象の世界に入つて彼等が實際に活かさうとするものは此悅ばしい具象の世界である。彼等の正當な意志は此自然と人生とを久しい靜寂から新な熱情に呼び覺まさうとする事にある。「深遠な審判によれば、最も抽象的な眞理は最も實際的である」と云つたエマソンの言葉は吾々の新しい理解を招いてゐる。內感 Empathise し得ない眞理は、その存在を一日も許されてゐない。理論は實現せられるが爲に告げられねばならぬ。眞理の存在は遂に切實な味識であり愛である時にのみ可能である。眞に知るとは味ふとの意味である。

哲學最後の知識がかく情意を以て滿足せられた理知であるならば、かゝる理知の世界は吾々に究竟の世界を示現する。理知はそこに於ては眞そのもの美そのものを體認する。哲學的至上要求としての實在はかゝる時吾々の心に閃くのである。吾々が呼んで實在の知識と見做すものは嚴密な意味に於て眞善美そのもの、更に切實に云へば神そのものゝ知識である。哲學的究理の心とはかゝる實在を戀慕するの情愛である。此愛を知る凡ての哲學者の顏には悅びの微笑みがたえず浮んでゐる。彼等の知の要求は此愛の要求に基いてゐる。吾々が究めようとするのは嚴肅な眞の世界である、然し美は一日もその世界から奪はれてはゐない。吾々が追ひ求める實在の世界は思慕 Eros の世界である。

哲學的思索の方向は實在に向けられてゐる。思索には抑へ得ない此實在嚮動 Reality-tropism による力がある。吾々が思念し經驗し得る最も切實な此當面の目的をおいては、哲學は只永遠の彷徨を續けしめる迷園 Labyrinth である。中心からの分離は悲慘な最後を豫想せしめる。神に對する憧憬を除いては宗教は一個の空洞である。實在に對する愛着を忘れては哲學は死の沙漠に過ぎぬ。花が美に傲る樣に哲學は實在の思想にその誇りを示さねばならぬ。實在は吾々の心を引きつける愛の問題である。此思慕の情を離れる時思索には只抽象的理知

の遊戯がある。生命は焰を燻らして冷かに凝固し消滅する。實在に如何なる色彩を染めるかは、その理知の運命をさへ支配する。哲學に現はれた樣々の ism（學派）は此實在を如何に見守るかによつて決定せられる。（實在を「我」に限界する者は Solipsism（唯我論）につき、之れを觀念に求める者は Idealism（觀念論）を迎へてゐる。又物自體（Ding an sich）に事物の客觀的本體を是認しようとする者は Realism（實體論）を愛し、萬有を只心と觀ずる者は Spiritualism（唯心論）を說き、物質を唯一實在と見做す者は Materialism（唯物論）を固守してゐる）。その何れの學派を擇ぶにせよ、哲學者の歸る故鄕は此實在の故鄕である。吾々は愛を持つ國土を求め慕つてゐる。吾々の眼には實在の幻像が朧げに現はれ浮んでゐる。理知はその世界を模索する不斷の努力である。幻像は慈母の溫みを內にふくめて人の近づくを待ち侘びてゐる。思索は歸省の心である。ノヴァリスが殘した斷片錄に余の最も愛する哲學の定義がある。

'Die Philosophie ist eigentlich Heimweh, ein Trieb überall zu sein'.

哲學の世界は思慕の世界であると余は想ふ。古くプラトーンが Phaedrus に述べた思想は嘗て言ひ放たれた眞理のうち最も美はしく深い思想である。實在は理解せられる爲に人間に愛の心を與へてゐる。哲學はその誕生を此思慕の心に發してゐる。實在はたえず絕大な求心力を以て人間の知情意を引きつけてゐる。此焦點に自己を移入する事が思索の歸趣であり又生命の法悅である。かくて凡ての學說は此中心的事實を理解するものであらねばならぬ。若しも哲學が何等の光をも實在の眞景に與へ得ないなら、それが如何なる論理的精緻を有するにせよ、吾々にとつてその哲學は無意味である。實在の眞相に矛盾すべき理論は吾々の思索圈內から驅逐せられねばならぬ。哲學に起り得べき凡ての辭句、又はその風調は實在の讃歌たるべき使命をおびてゐる。ダビデの詩篇に流れた人間の血脈は又哲學書の內に躍り流れねばならぬ。嘗て萬能な神を語る時

人間が底知れない感激を感じた樣に、實在を語る筆は自から宗法の至悅に水滴らねばならぬ。神に放つ矢が愚かにも己れの胸を突きさす樣に、實在に對する理論の反逆は哲學の亡滅である。實在は哲學的至上要求である。凡ての理論は此要求を滿たす時に於てのみ是認せられねばならぬ。實在の思想に於て哲學者は自己を懺悔する。猶豫せられない神の審判の聲は、刻々に吾々の頭上に響き渡つてゐる。

哲學がその濫觴を思慕に發し、歸趣を內生に果すならば、哲學の問題は啻に理論の問題であつてはならぬ。更に多く事實の問題 'Quaestio facti' であらねばならぬ。認識論は只論理的內容に終末すべきものではない。形而上學は只理知の體系に止るべきものではない。凡ての理論哲學は直接生命の學としての權威を具有せねばならぬ。(ベルグソンが「創造的進化」の序文に「認識論と生命論とは不可分離である」と云つたのもこの意味に理解せらるべきである)。彼等が理解

すべきものは名目よりも價値である。形態よりも意義である。哲學の抽象的理論は具象的事實と結合されねばならぬ。彼は理知の對象としての實在を過ぎつて、生命の要求としての實在を理解せねばならぬ。その說明が第三者としての說明に始まるにせよ、その終るべき處は第一者としての內生である。理論と內生とは和絃の美を示さねばならぬ。知識は味識たることを要求する。知能は旣に直觀への昇揚を內意する。知は愛を抱かねばならぬ。哲學は理知であると共に恍悅(Illumination)であり、說明であると共に覺照(Enlightenment)であらねばならぬ。哲學は人々に福祉を贈るべき使命を帶びてゐる。哲學は「活きんとする意志」を新しく活かさねばならぬ。體感、味識、內生、愛、是等の言葉は哲學者の最後の愛を招いてゐる。

余は再び云ふ、實在が吾々の哲學的至上要求であり、又哲學の方向がこの中心を指す限り、哲學の內容は實在に閃き輝く法光を理解するものでなければなら

ぬ。若しもその理論が此至悦を破る又であるならば、彼等が畫く世界とは內生し得ない虛空の概念に過ぎぬ。彼等の示す眞理は遂には自滅する理知の產物である。眞理とは直ちに內生であらねばならぬ。實在は生命に實現せられた究竟の世界である。之を事實に判すれば恍惚の境である、法悅の事實である。實在はその至極に於て神そのものを示現する。哲學者は正に刻む可き神の姿を心に畫いてゐる。理論の凡ての鑿はその一立像を造る爲にのみ石を刻まねばならぬ。最も偉大な哲學は同時に神の詩歌であり宗敎である。哲學には美があれ、預言があれ。神の權威は自からその思索的辭句に含まれねばならぬ。

二　實在の本性

實在の內容は生命の至上要求を滿たすものでなければならぬ。實在を語る時

哲學者は彼の生命の莊嚴な歸趣を語つてゐるのである。實在に關する思想に於て哲學者は自己の上に最後の批評を下しつゝある。彼が要求の深さこそは直ちに彼が畫く實在の深さである。實在の內容はやがて個性の內容に歸る。余は余の實在に關する思想に於て神の審判を受けつゝある。いつかは凡ての人も猶豫なく此審判を受けねばならぬ。

余は實在を嚴密に價値の世界に求める。內心の至上要求に呼應すべき實在の內容は價値を離れた概念に止まるべきではない。名目、比較に止る一切の知識は實在の完全な觀念たり得る事は出來ぬ。實在は最も切實に純一な價値を表示せねばならぬ。抽象的概念若しくは形態に止る物體に不動の實在を求めようとする哲學的努力は、最後の是認を享有すべきものではない。概念は反省對比に起る最も冷靜な名目的批判に過ぎぬ、名目は永遠に名目性を反覆する。名辭は實在に附せられた假相である。人は形體ある事物を顧みてそこに具象性の最も

平明な姿を認めてゐる。然しかゝる思想は單に思考の幼稚を示すに過ぎぬ。吾々が呼んでその形狀、素質と見なすものは吾々の思惟の反省的所產であつて、純粹な具象的價値そのものではない。實在とは名狀し得る物體ではない。既に吾々の名辭形容をすら許さぬ價値的事實そのものであらねばならぬ。實在は定義される事を嫌ふ。無限の暗示であつてこそ余の要求に堪へ得る實在である。價値は形態ではない。活作である。(藝術としての音樂に對する最高の理解は物理學的若しくは美學的知識によつて成立するのではない。既に一切の反省思惟をすら絕した音より溢れ出る美そのものゝ體感にある。それは價値的事實であり純粹の具象的經驗である)。

思惟の前に開ける世界は差別の世界である。思惟は既に主客の對立を豫想する。思惟判斷に於ては自己と對象とに對立的關係がある。物心の分離に成立する理知であつて、その合一に示現される內生ではない。價値であり活作である

べき實在はその眞意に於て既に對象として止まり得べきものではない。吾人の至上要求は差別からの解脫を請求する。實在は批判的概念、若しくは形態的物質中に止る事を排斥する。彼は對象ではない、目的それ自身である。道程ではない、歸趣である。手段ではない、終局である。相對ではない、絕對である。名目ではない、意味である。存在ではない、活作である。實在は對比にその存在を待つのではない。それ自身に於て完全の意味を滿しつゝある究竟の事實である。實在はあらゆる差別相を驅逐し滅却する。哲學的要求としての實在は獨立自全の活動であらねばならぬ。自全は自律である。第三者は之を亂す何等の力もなく、又それを補足する何等の權威もない。實在は實在に於てアルファでありオメガである。充全である、圓融である。常にそれ自身に於て安定な絕對性を保有する。哲學は嚴密に實在の觀念から、あらゆる對比的差別的觀念を絕滅させねばならぬ。從つて實在を思惟若しくは形態の世界に見出さうとする哲學的

思索は、吾人の要求の忍び得る所ではない。思惟の世界は差別の世界であり、形態の世界は對立の世界である。生命の至上要求として充全である可き實在は、一切の對當的區劃を絶滅した第一義のものであらねばならぬ。對峙的關係は絶對的至上に到達しようとする努力の途程である。差別分離は尙矛盾、模索の世界である。生命が最後の平和を充たすべき處はかゝる試みの世を過ぎて、主客の爭が終る處であらねばならぬ。要求擴充の實在に於ては物心の差別も融和に微笑まねばならぬ。我と云ひ非我と云ふかゝる態度は既に實在そのものゝ眞景からは遠く離れてゐる。生命が擴充せらるゝ處は、一切を包含する融合渾一の境である。自我も自然もその對峙を滅して統一ある價値の事實に遷らねばならぬ。主觀は客觀に沒し、客觀は主觀に活きねばならぬ。凡ては滅するが故に、凡ては新に甦るのである。之を裏面より觀ずれば寂滅である、非有である。佛陀が呼んで涅槃と云つたのは此究竟の世界である。之を表面より見れば充實で

ある、有である。基督が呼んで愛と云つたのは此世界である。實在はかゝる統一的活作である。彼は部分の加ではない。渾一的全體である、綜合である。その示現や必ず有機的である。否、有機無機を越えた未分者である。

實在こそは自由である。吾々が思念し得べき自由とは、此實在を離れては不可得である、又不純である。自全なる實在のみ自由である。凡ての決定論は實在の說明に於て沈默を强ひられてゐる。余は永遠の活作、絶對の價値に對して自由を是認する事を躊躇する理由を知らぬ。自由は實在に於て證明を要しない事實である。

理知は常に證明を求めてゐる。人間は一切のものがいつかは理知によつて證明せらるべき事を前提する。然し余は只一事に於て此夢想が破られる事を知つてゐる。理知はいつか理知を絶滅すべき期に逢着する。その時人間は一切の思惟を棄て去つて、その對象に自己を沒してくる。その時對象は理知によつて立

證されるのではない。理解によつて肯定されるのである。既に對象ではない。言語辯明を絶した絶對事實の境に遷るのである。其時人は實在の美酒に醉つてくるのである。實在は證明によつて示現されるのではない。愛によつて理解せられる究竟の事實である。余は理知の證明が實在の中に於て沈默せられるのを知つてゐる。愚昧な人間は神の實存に對して證明をと求めてゐる。然し之が思想の超過症に基く妄想である事を誰か疑ひ得よう。神の實存は內心の無上要求による莊嚴な事實であらねばならぬ。神は凡ての理知的證明を脚下に絶滅する。神は對象たるべきものではない、內生する事によつてのみ理解し得られる嚴然たる價値的事實である。神は愛であると云つたイエスの言葉は玆に全く理解せられねばならぬ。

實に余が求める實在は愛そのものである。そこに一切の差別は融合し、對立は抱擁する。殘るものは只悅び光る愛の事實である。余は敬虔な心に滿ちて、

哲學的至上要求としての此實在が宗教的至上要求としての神そのものに一致する事を書き添へねばならぬ。神は實在の姿 Eidos である。實在に於て人は常に神の幻像 Vision に面接する。神は遼遠たる天上の彼岸に屯するのではない。實在に吾々が內生する時、我が心臟は神の氣息に波打つのである。耳に響く鼓動の高さは悅ばしくも我が內から響くのである。神は人間と隔離する超越的存在ではない。神は既に吾々の前に在る事をすら許されぬ。理知が高遠な追求によつて神を前に捕へ得たと信じる時、彼が吾が內心の裡から光り輝く事を誰か否み得よう。神は常に吾々と一體ならんことを求め給ふ。神は我との間に罅隙を作る事を許し給はぬ。神は愛としてのみ吾々に示現される。愛に於て吾々は神を味識するのである。神に對する知識とは神に對する愛である。愛のみ眞の理解である。哲學的要求としての實在とは此理解の世界である。渾一と云ひ融合と云ふのは只此愛によつてのみ示現し得られる。神は主と客とを愛に結び、

物と我とを一つに流れしめる。吾々は既に神を離れて神を語るのではない。神の懷に溫められつゝあるのである。パウロは此時「吾れ活けるに非ず、基督我に在りて活ける也」と云つてゐる。ベーメは此眞理を「人は神の氣息によつて造られる」と云ひ破つてゐる。吾々が活きるのではない。神の氣息に吾々が活きるのである。

信仰は神に對する無限の追慕である、信仰は最も溫かい理解である。理解とは愛の情である。愛こそは實在である。哲學は遂に宗教を抱いてくる。

實在とは神の閃きである。實在の知識は神の知識である。余は凡ての知識が何等かの程度に於て實在の知識を分有する事を信じる。余は知の對象として成立すべき一切の問題はその根柢に於て神の問題を內意する事を信じる。一切の知識は棄てらるべきものではない、「何事かを知る事は常によき事である」とゲーテは云つてゐる。凡ての知は神の故鄕に歸るべき思慕の情を潛めてゐる。

凡てのものは實在の世に甦る事を戀ひ求めてゐる。自然の深い希願は此至上事實の承認である。

自然を理解しようと試みる者は實在を理解せねばならぬ。實在の知識は一切の知識の根柢である。實在の理解は哲學的智識の開展である。凡ての思索は茲に理解の鍵を得て彼が訪ぬ可き扉を漸次に開くのである。彼は實在から分化せれた諸々の現象を語る前に、實在そのものを味識せねばならぬ。神學は直接神の知識を持たずして何等の思想をも與へ得ない。實在に關する理解の渾沌はやがて自然に關する理解の混迷を導いてくる。恐らく凡ての學派の是非はその學說の承認する實在に關する理解によつて最後の審判を受ける。哲學者は實在の思想に於て自己を表白する。神を語る時、宗教家は彼自らを評價しつゝあるのである。

若し懷疑の追求が遮斷せられる境があるならば、それは實在の域に於てゞあ

る。理知は何の權威あつてその存在を疑ふとするのであらうか。實在に對する遲疑は神に對する逡巡である。此絶大な事實に放つ反逆の矢は遂に自らの胸の上に落ちねばならぬ。吾々の原素的衝動は、實在又は神に對する嚴肅な要求である。此切實な心の要求こそは神の喚求である。喚求 call は不可抑である。この生命の權威には抗し得る何ものもない。凡ての哲學者は此内心の召喚に答へねばならぬ。余は此抑へ難い生命の意志に偉大な使命を感じてゐる。要求の消滅は生命の死滅である。恐らく人は彼の思慕が如何ばかり多く神に向けられてゐるか否かによつて運命を決定する。哲學者は彼の實在に關する觀念に於て彼の價値を表白する。神の證明、實在の立證は彼等に對する無上要求の内に既に内在する。吾々の生命が活きつゝある事によつて神の實存は最後の證(あかし)を示してゐるのである。神に對する愛は神に對する知識である。「ヤーエを畏るゝは知識の本なり」とソロモンは歌つてゐる。實在の愛慕は哲學の出發である。

三　實在の成立

かゝる渾一的統體としての實在は如何にして可能たり得るであらうか、余は愛としての實在が如何なる道程を經て實現せられるかを究めねばならぬ。問題は茲に哲學的思索の圏内に深く入つてくる。然しその答へは一般の想像よりも遙かに重大であり然も詩趣がある。吾々は今實在が顯現せられる足跡を親しく省みて、自然が如何なる神秘を内に潜めてゐるかを知らうとするのである。余は此問題に答へる爲に抽象の論理よりも寧ろ次の例證を以てその立論を起さうと思ふ。試みに余は畫家セザンヌによつて殘された一枚の畫布を讀者と共に眺めてみたい。多少溫かい藝術的理解があるならば、彼の一靜物畫は直ちに驚く可き感情を吾々に目醒ましてくる。その貧しい外裝を通して、靜物の心とも見

做すべき力が躍如として觀者の眼を閃き過ぎると思ふ。吾々の親しい理解は彼の筆が既に事物の假象 Appearance を過ぎて、物如 Thing-in-itself とも呼ぶ可き基本の世界を表現してゐる事を告げてゐる。畫家は只默する壺又は果物を捕へてその描寫に筆を止めたのではない。現はされたものは彼等の精、更に平明に云はゞそこに内在する實在の光華である。彼は此の究竟の藝術を果す爲に何等人爲的理想をすら加へてゐない。人は寧ろその形體の奇異と色彩の異常とに屢々驚いてゐる。然し彼によつて畫かれた素朴なその靜物は凡ての必然性を保有して宛ら山嶽の如き莊嚴と安泰とを示してゐる。吾々は茲に平易な事物さへ彼の精靈との接觸によつて神聖な光りに輝くのを感ぜざるを得ぬ。彼が畫いた靜物は宗教的眞を示す靜物である。かゝる權威は今吾々によつて更によく理解せられねばならぬ。

想ふに筆が彼の手に委ねられる時、彼は異常な心の發現によつて彼に面する

靜物中に自己を沒入してゐたのである。彼の全個性は對象の内部に擴充し飽和して渾一の境に漂つてゐたのである。恐らくそれ等の靜物も畫家の個性と融化する事によつて、その物的束縛をすら絶滅し得たのである。實現せられたものは畫家の精であり事物の華である。彼等は既に對峙する二體ではない。現存するものは統一せられた價値的活作である。彼は物に活き、物は彼に活きたのである。彼等は共に一體の實在に甦つて、流るゝ如く音律的美の世界に活きてゐる。畫家が表現しようと試み果したものは此切實な純な内生の感激である。外圍の寫實ではない、事象にひそむ意味の世界の表現である。物それ自體をさへ露出し得た此奇蹟に對しては、あらゆる讃嘆の辭を捧げねばならぬ。

藝術の價値は只その美によつて限らる可きものではない。嘗て詩人キーツが「美は眞であり、眞は美である」と歌つた事がある。余は藝術が眞の世界の表現としても幽遠な價値を具有する事を認めてゐる。（余にとつては自然と藝術と

は啻に哲學にとつて驚く可き暗示を投げるのみではない。彼等は具象化せられた哲學そのものである。余が「哲學の衝動を美に求めるのは、そこに最も多く眞の世界がある事を味ふからである)。美としての藝術は又哲學的にも理解せられねばならぬ。實在の藝術は又實在の哲學である。余はセザンヌの畫布を想ひ起す事によつて玆に實在に關する哲學的反省を鮮かに加へようと思ふ。先づ加へらる可き問ひは、かゝる實在が如何なる過程を經て體現せられるかにある。余は直ちに此統一的究竟の事實が常に一つの條件を必須として實現せらるゝのを認めてゐる。

統一は對立を內包とする。幾許かの反省によつて此事實が底深く自然に充ちてゐるのを知る事が出來る。實在はその意味を完了する爲に、いつも主體客體の對立を豫件として成立する。靜物が彼等の沈默を破つて、その精その物自體をも吾々の前に露出し得たのは彼等が畫家に面接し得た喜びによるのである。

認識せらるゝの幸は彼等が認識主體を前に持ち得る時にある。畫家がよく全個性をも表現し得る至悅は、彼の前にその心を托すべき自然が橫つてゐるからである。畫家は常に自然のうちに戀人を見出してゐる。實在が體現せられるのはかゝる主客が對立の喜びを見るからである。玆に兩者(畫家及び靜物)は一個の(實在と云ふ)意味の世界を示現する爲の二個の(主體及び客體と云ふ)相關的存在である。對立は關係であり依存であり、旣に相互の思慕を內意する。愛としての實在が現はれるのは此二つのものに戀慕の情があるからである。世は幸にも一面に終る悲みから永遠の離脫を遂げてゐる。實在の福祉は孤獨にその姿を現はさない。實在は雙對 Pair を求めてゐる。余は物心の交、心身の和、男女の愛が、實在の世界に認許せられた久遠の律法である事を信ずる。ホイットマンは余の心を歌つてゐる。

'I will make the poems of materials, for I think they are to be the most

spiritual poems'.

'I am the poet of the Body and I am the poet of the Soul,
The pleasures of heaven are with me and the pains of hell are with me.'
'I am the poet of the woman the same as the man.....
And I say there is nothing greater than the mother of men.'

想ふに實在はその意味を表現する意志に飢ゑてゐる。彼はあり得べき凡ての機會を捕へてその飢を滿してゐる。自然を被ふ物心の二體とはその意志の發現 Manifestation である。實在は自然を思慕の自然に致す爲に兩性を與へてゐる。神は美の實在に自然を甦らす爲に花には美の姿を、人には愛の心を與へたのである。彼等には顧られ顧る互の悅びがある。認識は愛を事物に目覺ましてくる。認識の世界には一つとして實在の光りに缺けたものはない。(余は認識論を論理の限界に決定する哲學的態度を容れる事は出來ぬ。在來の認識論 Er-

kenntnistheorie は既に Erkennen (味識)と云ふ辭句の味ひを忘れてゐる。味識とは事物の內面的了解である。實在內生の事實である。認識論は常に實在又は神を闡明すべき使命を果さねばならぬ)。認識とは既に物心に橫はる溫かい關係を內意する。凡ての事物は此認識の圈內に在つて、彼等の內性を披瀝する機會を得てゐるのである。認識の心は凡てを拉して實在に活かさうとする事にある。知覺の方向は必ずその終局に於て實在に向けられてゐる。知覺する者と知覺せられる物との對峙は、共有の至實たる實在界に彼等を活かす爲である。天國と地獄との相愛を歌つたブレークにも次の言葉がある。「若しも知覺の戶を淸めるならば、凡てのものは無限を示してくる」。

愛なる一を現はすが爲に、思慕の雙があるのである。二つに別れるのは一つならんとする心である。一つなる實在は二つなる物心によつてその意味を果すのである。統一は差別の礎に安定な意味を保つてゐる。圓球とは兩極の最も完

全な發現である。和絃は二絃を豫想し、對立は和合を慕つてゐる。圓融の實在は相對の理を法として此世界に顯現するのである。余は宇宙の一切の事項が此極性 Polarity の原理によつて、各々の存在に永遠の意義を潜めてゐる事を確信する。余は立論に一層の明晰を與へる爲に、世界に此極性が失はれる日を想像したい。直ちに恐るべき虛空の世が亡靈の如く吾々の前に現はれてくる。

若し世界が單一性に終るならば世界は無に歸らねばならぬ。若し一切が黑色と云ふ單彩に塗抹せられるなら、茲にいち早くも消滅するのは黑色と云ふ概念そのものである。黑色が色彩としての意味を保有する爲には必ず他の色彩との對比を須要とする。黑色は一つの極として、他の極の存在を豫想してのみ可能である。現象界に於て如何に此對立の二元的關係が精緻に編まれてゐるかは幾多の實例によつて指摘する事が出來る。一切の自然事象は此原理をおいては哀れな沈默の運命を永遠に續けねばならぬ。あらゆる觀念はその誕生を相對律に

發してゐる。同速度を以て進む二個の物體間には運動の觀念は消滅する。行く雲も飛ぶ鳥も何ものか靜止するものに對比し得る時にのみ飛翔の意味を果すのである。光は暗きに輝き、音は靜けさに冴えるのである。丹青の布は色調光度の複雜な統體である。樂律も亦高低强弱の對性にその美を發してゐる。一切の力學的現象は只此原理に服從する時にのみ可能である。比重が平均化せられるならば重量は事物から奪ひ去られる。對立抵抗は自然をしてその意味を保有せしめる要律である。善美の理想さへも、邪醜の世にのみ榮えるのである。地を否むのは天を否む矛盾である、肉を矯めるのは靈を刺す痴行である。若し一切の現象が物質に還元せられるなら、物質は如何にして存在し得るであらう。若し世界が凡て觀念であるならば、それが觀念たる事を如何にして知り得るであらう。唯物、唯心の各哲學的主張が世界を一面に限る時、彼等は再び起ち得ない破産にその運命を終へたのである。一切を單一に限る世界觀は、現象を全然不可

解な領土に導いて、明瞭な自然に人爲的不明を與へるに過ぎぬ。自然の進化は雷に盲目的なるに止らず、進化そのものゝ意義をさへ理解する事は出來ぬ。自然から此極性を排除しようと企てる者は、渾沌の世を賞するディレムマに身を終へてゐる。余は神が一元の實在に自然を甦らす爲に、物心の二元を創造し來つた事を驚きの眼を以て見つめてゐる。

物心の兩極は自然に永遠な密着と切合とを與へてゐる。一方の否定はやがて自然の否定である。物は心を待ち、心は物に活きてゐる。彼等には相關の神秘がある、補助の和合がある。靈に對して肉を殺す時、不可思議な諷刺によつて屠らるゝものは靈自らである。天國と地獄とには永遠の婚姻がある。物心の離婚は自然に許されまじき反謀である。心も物もそれ自らに於ては半である、彼等は圓融としての實在を示現する爲に共に合して一つに遷らねばならぬ。神は心の物的表現に活き、物の心的統體に活きる。彼等はその發生の端初に於て相愛

の敎へを受けたのである。進化とはかゝる神意を體現するが爲の生命及物質の發展である。進化には意味の不斷な表現がある。進化 Evolution はその眞意に於て內展 Involution である。自然は今此榮譽ある神の創造の途上にある。物質なくしてはかゝる表現を得ず、生命なくしてはかゝる發展を得ない。「對立なくば進步を見ない」とブレークは云つてゐる。二元的對立は一個の意味を表現するが爲の必須的條件である、自然は神意を果す爲に世界に雙對の愛を與へてゐる。余は自然が此愛に飽和してゐる事を信じる。

'Nature, with endless being rife,
Parts each thing into 'him' and 'her,'
And, in the arithmetic of life,
The samllest unit is a pair.' —Patmore

余は凡ての愛の詩句に明晰な理由がある事を認めてゐる。既に單純な言語に

於てすら此雙對の辭句に溢れてゐる。如何に對辭が廣汎な域に普及してゐるかは寧ろ想像の外である。相對の原理は殆ど無意識に達する程、普遍的であり根本的である。試みにかゝる辭句を枚擧するならば人はその數の煩はしさに病まねばならぬ。天地、東西、上下、左右、遠近、高低等空間に現はれる對立、又は深淺、强弱、美醜、陰陽、明暗、貧富、新舊、遲速、善惡、眞僞等質量の差違によつて生じる對比、又は因果、始終、受動能動、肯定否定、綜合分析、具象抽象、主觀客觀の如き概念的對句、或は性より現はれる男女、物心、無機有機、動物植物の如き、かゝる相對的名辭は事象の無數と共に無數である。人々は爭ひの言葉を發する時にすら愛の言葉を用ゐてゐる。雙對の關係を離れては凡ての文字、文學は空虛である。（文法上にも興味ある幾多の事項を注意する事が出來る。凡ての名詞及代名詞は必ず極性の一つを表示する。主辭及賓辭は兩極の對立である。凡ての形容詞副詞、動詞は此對立間の關係を表示する。余は物心の間に彼等を包攝する

關係の世界があるべきを思ふ。例へば「余が薔薇を見る」と云ふ時は、余と花とは對立し、「見る」と云ふ動詞に於て兩者は關係の世界に入つてゐる。「見る」「認識する」と云ふ時は既に美又眞の感情を伴つてくる。茲に吾々は實在の圈內に踏み入るのである。實在は既に自然の中に飽和されてゐる。余が向に「凡ての知識は何等かの程度に於て實在の知識を分有する」と云つたのは此故である）。

圓球は美である。彼は至る所に極性を保つからである。圓かな球にも比すべき神は常に又凡てに此極性を保つてゐる。人は自然に現はれる二元的對立を見守る時一元の神を見つめてゐるのである。對立は反抗ではない、依存である。神は密切な結合の上に祝福を與へてゐる。人類は早く此結合の意味を自然に讀まねばならぬ。人は人を戀ひ、物は物を引き、凡ては神に向つてゐる。全自然はかゝる二つの流れに漂ふ韻律の現はれである。全宇宙は二つのものが互に戀ひ慕ふ愛の花園である。思慕は自然の心である。

實在は絶えずその立像を現はさうと試みてゐる。實在はその抑へ得ない意志を體現する爲に自然を產み育んだのである。自然の進化は實在の開發である。人間の創造には神の君臨がある。上帝はその榮光を地に示す爲にその聖い「氣息」によつて人を產んだのである。自然の歷史には嚴かな攝理がある。その內展の過程は燦然たる光華に滿ちてゐる。事物の存在はその誕生を神意に發してゐる。自然に現はれるあらゆる極性は、その祝福を告げる爲である。對比はその發生上の意味に於て、實在體現の使命をおびてゐる。凡ての兩極には求心の力がある。神は圓球の如く凡てを內に引いてゐる。思慕とは神に對する思慕である。自然は再び實在に甦らねばならぬ。「神のものは神に返せよ」と基督は銳く云つたではないか。神より流れた事物は神に歸る事を慕つてゐる。ジェルーサレムは必ずや歸り得べき都である。余は神の懷の溫かきを想ふ。人は幼時母の胸に養はれた幸を忘れるだらうか、子が親を愛する事は自然の情である。況

んや人が神を愛する事はその至情である。神は事物を神に導く爲にその委を彼等の思慕に現はしてゐる。彼等が安堵の地は彼等の旅路にはない。神の故國にある。余はプラトーンと共に神の故鄉を思慕する一人である。余の愛するブレークの句に、

'God becomes as we are, that we may be as He is.'

(余は玆に實在が如何にして示現せらるべきかを書いたのである。自然に存する極性をその成立豫件とする余の見方は二元論の問題を新に產んでくる。然し兩極とは互の分離排除を意味するのではない。二元とは一元を追ふ爲の相互依存の現象である。二元の背後は常に一個の意味卽價値的絕對者を豫想してゐるのである。一元を內意せぬ二元は此世に全く存在せぬ。余の二元的極性の思想は玆に全く二元論の離脫を內意するのである)。

四 實在の神性

二つのものが據る處には必ず收穫がある。互に求める心は何ものかを得ようとする力である。彼等はその存在を意味の世界に活かさうとするのである。あらゆる有形の物體はその形骸を越えて價値の世に甦る事を求めてゐる。物は物に終り、心は心に枯れる事を恐れてゐる。彼等はよく孤獨の寂寥を知りぬいてゐる。自己を閉ざすにしては彼等には餘りに強い愛の衝動がある。彼等は神の招きに應へねばならぬ。凡ての樹木が日光を慕ふが如く、自然には實在に對する響動がある。彼等が住む形態の地には既に天の心の飽和がある。糧は神の糧である。彼等の住む地の間には既に神の故郷がある。余はフランシス・トムソンと共に此地は天國の中にあるべきを想ふ。「地の美は肉を着た天の美である。かの天を示す神靈の裡に地は横はつてゐる。神の裡にこそ創造と云ふ偉大な思想は安置せられてゐる」。

余は凡ての確信を以て世界を形而下に限る思想を驅逐する。余は「地」なる觀念に「天」なる觀念を挿入すべき事の正當なるを想ふ。形態の世界は無形な天の心に安定せられてゐる。自然には實在の零氣の滲透がある。余は事物を想ひ起す時神を想ひ起す事の必然である可きを信じる。余は十分な信念を以て豐饒な實在界を此の自然そのものゝ內面に是認しようと思ふ。エマソンの句に云ふ、「よし一切のものが奪ひ去られるとも、余は尙余と永遠者との關係に於て一切のものを保有する」と。

人は此世界を時空間に排列して、一切のものが因果の關係にその運命を終るべきを想つてゐる。自然の研究者が好んでその理知の尺度とするものは量である、質である、空間である、時間である。彼等がその探求に挿入する思想は常に因果の原理である。然しかゝる思想態度は對象を形而下に限る時にのみ許さる可き事である。人間の理知は一切のものに因を訪ねようと試みてゐる。然し世

界觀が因果律に服從する時彼は實に遁還の背理を重ねるに過ぎぬ。因果の約束は實在の前に沈默せねばならぬ。科學は自然を此因果律によつてのみ說かうとする。然し此原理は神若しくは實在なる事實を自然の圈內から排除しようとする貧弱な思考態度に過ぎぬ。因果律には避け難い終焉がある。それは或約束に立つ限界に過ぎぬ。人は何の權威あつて神に理知の刄を加へようとするのであらうか。理知が神を理解したとする時、理知は既に神の裡に絕滅せられてゐるのである。實在の內生とは此理知の解脫を指すのである。(今日も尙、宗敎或は道德に於て因果的思想に固着してゐる說敎者がある。人間の究竟行爲を因果的に說明しようとする態度は啻に幼稚であるのみならず甚だ醜である。酬いられんが爲に吾々は神を信じるのではない。善は賣買の行爲ではない)。

余は實在又は神の思想に對して、あらゆる約束的思想の闖入を排斥する。余は明晰に時間、空間の念をすら此究竟の世界から放逐しようと思ふ。人は時空

間の存在が宛ら究竟の事實であるが如く見做してゐる。然しこの法則は約束律である以外に何等の權威をも有すべきではない。形而下の事項を對象とする科學者が此原理を彼等の說明に適應するのは至當である。然し形而上の問題に接觸する哲學者は何の稚氣を以て彼が畫く實在に時空間の約束を認めようとするのであらうか。約束は數的關係である。余は自然を數量によつて理解し去らうとする機械的思想に滿足する所以を知らぬ。實在は量ではない、活作である。形態ではない、意味である。彼は既に時空間の定限から永遠の離脫を遂げてゐる。(余は所謂「心靈現象」に多大の興味を感じてゐる。その夥しい材料は悉く時空間の束縛を離れてゐる。余はかゝる現象を只の妄想、若しくは迷誤として斥ける思想を受け容れる事は出來ぬ)。

實在の世界は意味 Sinn, Meaning の世界であり、價値 Wert, Value の世界である。物心の愛を示す相關の世界である。多くの哲學者は實在を物質に求め或

は意識に求め又は彼等を超越する彼岸の境に求めてゐる。然し實在は物的又は心的の名によつて呼ばる可きものではない。況んや彼等から隔離された遼遠な域にあるのではない。實在は物心の融合せられた相關の世界にある。その光りは內在 Immanence の光りである。神は凡てに此光りを放つ爲に一切の事物にその力を滿ち充たしてゐる。實在は潛勢力 Latent power である。エックハルトが「神は常に備へ、神は吾々の傍に在り、神は內部に在り、神は吾が家に在る」と云つた言葉も玆に理解せられるのである。

人は凡て神のものを物質若しくは精神の範疇に入れてゐる。然し余はその何れの範疇にも局限し得ない價値の世界を肯定する。此實在の世界に於てこそ物心は各々の區劃を絕滅し愛の活作に新な生命を起すのである。實在に甦る自然の光華には時空間に對する永遠の解脫がある。實在は歷史を消滅する。彼にあるものは永遠の「今」'Eternal Now' である。過去の反復ではない、永遠の新鮮で

ある。實在には不斷の新創 Novelty がある。實在は不死である。(ベルグソンは彼の持續 Duration の考へに於て時間に新しい理解を與へた。彼の哲學的先進であつたジエームスは彼が哲學を新創 Novelty の觀念の上に築いた)。

實在は自然の意味である。彼は物の形によつて表明せられ、又は心の名によつて代表せらるべきものではない。實在は一切の名辭をすら許さない無邊の自由である。彼は時間方處の約束をすら滅して此宇宙の一切に飽和し浸透する。若し玆に理學的言葉を許すならば、實在の本性は可入性 Penetrability である。彼は至る處に在り凡ての時にある。彼は一切の固形を離れた絕對の流動である、韻律である、音波である。余は神は音樂的であると想ふ。余は美はしい音樂を聞く時屢々死の本能を感じる。神は音樂に托して余を迎へるであらう。神の故鄕は必ずや美はしい音樂又は美はしい花園そのものである。(余は信徒が愛する樂園、淨土の思想にもその根柢には至當の理由があるべきを想ふ)。

若し余に形容を許すならば神は透明 Transparent であると思ふ。靜穩な水は凡ての姿を映じてゐる。そこには底知れない深さがある。澄む水は凡ての汚濁を洗滌する。神は彼の透明に凡てを映じ凡てを淨くするのである。(余は洗禮の起原に就て何事をも知らぬ。然し透明な水は自ら神の心の象徴であると思ふ。雪に基督教のみならず。清水が神前に使用せられる事は普通事である)。透明は凡ての説明を不可能にする。そは凡て無にして凡て有であるからである。無垢と聖淨と自由との神は彼を透明の血と肉と衣とに被ひつゝあると思ふ。實在の世界は透明の世界である。かの守錢奴すら花を美はしと感じる時、吾れを忘れてゐる。我を忘れるの時我れは透明の世に活きてゐる。物心の融合、思慕の喜びは此透明の悅びである。愛は最も純一な感情である。透明な愛に於て吾々は透明な神に一致する。余は余の愛するエマソンの句を玆に引用したいと思ふ。自然の美に至悅を感じる時、「余は透明の眼球となり、余は無有になり、萬有を見、

普遍的實體の大流は余の裡を貫流し、余は神の一部又はその一分子となるのである」。彼は又更に鋭い言葉を以て云つてゐる。「吾が地球は神の眼より見れば透明な一個の法則であつて事實の集團ではない。法は事實を融解してこれを流動的たらしめる」。

實在は既に對象たり得べきものである。人が彼を理解したとする時、人は彼に內生しつゝあるのである。人は神を味ふのである。彼に就て語るのではない。凡ての説明は神に於て中止せられねばならぬ。神に沒入する刹那吾々の呼吸は既に奪はれつゝある。最も深い雄辯を告げる爲に神は常に沈默に現はれるのである。カーライルは此沈默の秘密を解いてゐた思想家である。吾々は何の名によつて神を呼ばうとするのであらうか、「神は無名である」とエックハルトは叫んである。余は此叫びが神に對する最良の名である事を感じてゐる。聖オーガスティンも亦「神に就て言ひ得可き最良なとは彼の前に沈默する事である」。と云つ

てゐる。神は前に語られべきではない、内に愛せらる可きである。知の終局は愛である。人は戀人に何故愛するかを問ふであらうか。接吻は説明を否む。況や神の抱擁に於て凡ては沈默する。愛は宗教である、愛は科學ではない。(戀は人を盲目にすると云はれてゐる。此事は戀の罪過と見做されてゐる。然し凡ての美感理智を絶滅し我れを忘れしめる事に於て盲目的である。盲目的は必ずしも無目的ではない。却て目的それ自らに合一する場合がある。人は屢々戀によつて神に近づいてゐる)。最も深い知は常に愛であり、愛は常に鋭い理解である。眞理とは理知と直觀との合一する狀態である。最も偉大な主觀は最も廣汎な客觀に一致する。神は愛の狀態にあつて知と情と、主と客とを融合する。知の完了は説明の沈默であり、沈默は内生の開發である。神は默して味はるゝ事によつて深く知らるゝのである。神は理を絶するが故に一切の理を抱くのである。余は無有たり得るものゝみ眞の有であると想ふ。寂滅は復活である。涅槃は救濟で

ある。(余は認識論に於ける合理論と經驗論とがその終局に於て矛盾するとは思はぬ知と愛とは最後の合一を要求する)。

若し强ひて神の姿を畫けよと云ふ者があるなら、余はジオットーと共に只圓を畫かうと思ふ。若し能ふ可くば球を刻みたい。一切の平衡を持して圓融の相を示すものは球體である。彼には無限の適應があり自由がある。微細な接觸も彼の心を動かすに足りる。然も凡ての點は彼を支へる柱である。如何に切斷するも示されるものは圓形である。周圍には絶對の平滑があり、然も構造には無限の平衡がある。人は圓球に一點の變化をも犯し得ない。余はその形の豐饒と溫暖とを絶愛する。神は正しく此充全の相を示すのである。何者もその神聖を犯し得る力はない。彼は彼自らに於て無限に自由であり、無限に堅固である。余は神の幻像が此圓かな姿に宿ると思ふ。ヴォーンの歌に

I saw Eternity the other night,

'Like a great ring of pure and endless light
All calm as it was bright'—Vaughan

更に余に神の意味を求める者があるなら、余は只一の字を書かうと思ふ。神は渾一體 Oneness である。一切の多樣を攝取して一つに流れしめる。神に於て當に多は一つであり、差別は平等である。彼に於て一切の事物は同胞の歡喜に遷るのである。一なる神に凡てはその源泉を發してゐる。余は實在なき自然を想像する事は出來ぬ。渾一の否定は擾亂の承認である。原素的第一義的究竟の事實をおいては、自然の多樣は不可解である。一は統一である。愛である。一 One は神を象徴する。ブレークは山も河も森も石も一つに結ばれた人であると云つた。

神は無限の光明である。余は多くの神秘家が神を光に譬へた心を知つてゐる。如何に實在に活きる時、事物が輝き照らさるゝかを感じてゐる。恍惚 Illu-

mination 又は覺照 Enlightenment は神の心を示す可き溫かい辭句である。神の頭には背光がある。信仰は照らされた心である。神は暗い影にその姿を映さない。人は熱烈な多くの信徒が光の力、太陽を讃美する心の感激を理解せねばならぬ。凡ての光には信仰の影像がある。幾多の詩人は晴夜星を仰いで神の心を讀むだのである。青白く輝く月光にも人間の限りない訴へがある。光りは神の姿である。

余は傳說が佛陀の體に八荒の輝きがあつたと告げるのを自然であると想ふ。余をして基督の相貌を畫かしめるなら希くは彼の周圍に燦爛たる光を放たしめたい。嘗てシェレーが歌つた樣に永遠は白光に輝くのである。

'The One remains, the many change and pass;
Heaven's light forever shines, Earth's shadows fly;
Life like a dome of many-coloured glass,

Stains the white radiance of Eternity.'—Shelley

光は法光である。此心に活きる時、人は如何に無上の至悅を感じるであらう。余は更に又神秘的經驗に伴ふ恍惚 Raputure 法悅 Ecstacy 又は歡喜 Joy の心を歌はねばならぬ。余は神の面貌に絕えず微笑みのあるのを知つてゐる。ウバニシャッドが告げる樣に凡ての事物は永遠の歡喜にその誕生を發したのである。「吾れは幸なり、喜びは吾が名なり」とブレークは歌つてゐる。何故基督が嬰兒に天國の俤を認めたかは明かに理解せられねばならぬ。人は常に神の嬰兒である。

'Sweet Infancy!
O fire of heaven! O sacred Light!
How fair and bright!
How great am I,

Whom all the world doth magnify!'—Traherne

祝福 Blessedness 福祉 Felicity 幸福 Happiness 是等の言葉は又哲學者の愛を受けねばならぬ。彼の筆が哲理を語る時、彼は實在の讃歌を綴りつゝあるのである。哲學は眞理を美としても亦幸としても示さねばならぬ。

五　實在の世界

吾々はかゝる實在の福祉が如何にして此世界に現はれるかを見ねばならぬ。榮光と見做される凡ての人文は此實在の光華によつて永遠の生命を捕へてゐる。吾々が崇仰する一切の偉人は例外なく神の選民である。吾々が愛慕する一切の事業は悉く神の頌歌である。余は自然の進化には必ずや神の進化が伴ふと想ふ。此刻一刻は實在の拍節 Tact である。此絕大な眞理に悅び溢れた時ホイ

ットマンは歌つてゐる。

'I hear and behold God in every object……
I see something of God each hour of the twenty-four,
and each moment then,
In the faces of men and women I see God, and in my own face
in the glass,
I find letters from God dropt in the street, and every one
is sign'd by God's name.'

余はかゝる至悦の進りが字義的にも眞理であると思ふ。實在は喜ばしくもその姿を至る處に示すのである。何人にも樂しく現はれるのは藝術によつて表現せられる實在の世界である。吾々は多くの藝術家によつて自然が如何に夥しい美を示したるかを知らねばならぬ。貧しい一靜物すら山嶽の莊嚴を內に潛めてゐる。森も河も吾々に語るではないか、何人も彼等がさしのべる手を握らずして過ぎゆく事は忍び得ない。余は藝術は愛の會堂であると想ふ。凡ての信徒がそこに神を讃へ幸の一日を送る樣に、藝術は凡ての人々を悅びのうちに集めてゐる。何人も美の前には爭ひの鋒を納めて居る。藝術に於て人は樂むのである。彼は彼の悅ぶ故鄕をそこに見出すのである。彼は神に歸りつゝあるのである。

偉大な藝術家は彼等の心血の異常な働きによつて廣汎な未知の世界を彼等の前に見つめてゐる。彼等は他の彼等を對象の中に見出してゐる。事物は彼等の姿を映す鏡である。彼等はその凡てを自然の內部に浸してゐる。彼等はその呼吸の高さを自然の裡に聞いてゐる。彼等の身は畫く花の床に橫はつてゐる、心は畫く森の精に遷つてゐる。彼等と自然との間には何等の障壁すらない。「帳にしては自然は餘りに薄い。上帝の榮光は至る處に破れ出る」とエマソンは書いた。自然はその高調に於て旣に對象ではない。自然の美は外に見らるゝのでは

なく內に味はれるのである。美は凡てを融解する。[52]凡ての事物には人の心を容れるべき室房がある。愛とは此房中に自己を見出した喜びである。偉大な藝術は凡て此結合の藝術である。藝術はその至純に於て常に實在の藝術である。哲學も實在の思想に於て凡ての人を一體に結ばねばならぬ。

天も地も人の愛を招いてゐる。人々は何故自然が美の衣に裝ふかを理解せねばならぬ。事物は吾々の前に橫はつてゐる。彼等の美の裝ひは實在の世に活きようとする本能の發現である。自然の原素的力は活きようとする意志である。實在に甦らうとする抑壓し得ない本能の力は彼等の中に溢れてゐる。年々歲々春花の微笑むのは此飢ゑをいやす爲である。彼等はその凋落の葉にすら色を染める爲に秋の紅ゐを裝ふのである。余はラスキンと共に種子は花の爲にあるべきを想ふ。かゝる事は無益な妄想ではない。自然の心は彼女の美に讀まれ得ると想ふ。そこにも莊嚴な神への響動がある。曾てカントは天の星を仰いで崇仰

の想ひに跪くと云つた。余は此一句にカントの偉大が最も美しく暗示せられてゐると思ふ。萬卷の哲學がその最後の頁を終る時人は遂に默して祈りに跪くであらう。余は可憐な一枝の花にも凡ての哲理は含まれてゐると思ふ。彼等は人の訪れを待ち詫びてゐる。蟲の訪れにすら花には悅びの笑ひがある。彼女は人の一瞥にすら愛の滿足を感じるであらう。ゲーテの詩「菫」に此情を歌つた句がある。恐らく詩人が綴つた樣に野に咲く菫は牧童の足に踏まれる時にも愛の飢ゑを滿たすであらう。況んや愛せんとする意志は人類が保有する永遠の至寶である。人は何故にしかく長き躇ひを愛に加へるのであらう。意志は愛に活きようとする意志である。凡てのものは愛さるべき爲にあるのである。凡ては互に語りたがつてゐる。

'Stranger! if you, passing, meet me, and desire to speak to me,
why should you not speak to me?

And why should I not speak to you ?'—Whitman

愛の世界は只藝術家のみの世界ではない。かの冷かと見做されてゐる科學者にすら天啓は降ると思ふ。一物體の落下すらニュートンの眼の愛に、永遠の眞理を産み得たではないか。科學者が暗夜、天に星を仰ぐ時、彼等は冷かな星に對してゐるのではない。彼等がその運行の探求に餘念ない時、彼等は星にその心を宿してゐるのである。彼等がアトムの微に心を注ぐ時、彼等はその小微物に情人を迎へてゐるのである。法則とは科學者と自然との間に結ばれた愛の記念である。彼が理知によつて法則を知る時、彼等は法則を味ひつゝあるのである。恐らく科學者とは法則の招きに誘はれる藝術家であらう。藝術家が美の招きによつて自然の懷に入る樣に、科學者は法則の愛に招かれて自然の裡に活きるのである。冷かな彼等も既に間隔を絶して對象中に自己を見出してゐる。發見とは對象との合一である。自然と彼等との最後の融合が法則であり眞理である。余は科學者もその探求の高調に於て甚だ藝術的であると思ふ。余はポアンカレーと共に科學の研究にも直觀の力が鋭く働いてゐると思ふ。科學者は活きた實在を圖形の上に構成しつゝあるのである。嘗てコールリッヂは「詩文の對辭は科學である」と云つた事がある。然し余は彼等がその終局に於て友愛の手を握る事を知つてゐる。嘗てホイットマンは「一枝の葉は星の萬年の働きにも劣らぬ」と云つた事がある。此言葉はかのケルビン卿がミニオネットの花を顧みて「天の星よりも多くの神秘を宿す」と云つたのと同一ではないか。「一つの花にも神の存在を理解する者には、その一微物は全世界よりも尙貴いであらう」とエックハトルは云つた。余は最高の科學は最高の詩歌と一致すると想ふ。詩人の鋭い直觀がいつか科學的にも理解せられる事を余は確信する。眞は遂に美であり、美は遂に眞である。

余は善と云ふ考も等しく此實在を離れては思惟し得べきものでないと想ふ。

道德は至上事實としての善を肯定せねばならぬ。善は一言にして云へば個人の客觀化である。道德は個人と個人との抱擁に起る。彼等の密着をおいて善は凡ての意味を失はねばならぬ。個人が他人の裡に活きる時善は最後の祝福を受けるのである。人の間に結ばれた愛の帶を破る者は、惡の罪を犯すのである。分離、隔絶は人間の嘗める悲哀であり恥辱である。善は人を人に結ぶ愛の力である。吾々が他人を憐む時吾々は他人に自己を移してゐるのである。之は善であり美である。何故ならそこには主客の對峙は消失して兩者の關係は渾一的實在の狀を示すからである。善は實在に一致する。善はそれ自らに於て絶對である。人はよく善に報酬を求めてゐる。然し善は善に於て一切の價値と意味とを內意するのである。最初にして最後の報酬は善それ自身の裡に內在する。若し茲に報償の念を入れ得るなら、善爲とその報償とは同時的である。神に對する祈禱は報酬の豫想ではない。善は絶對自全の力である。善行爲は實在內生である。此時個性と個性とは至純な愛に神の福祉を受けてゐるのである。善には莊嚴な無上事實がある。カントがかの星に對すると共に崇仰の念に打たれたのは人間にひそむ道德律であつた。余は彼の所謂無上命令(Der Kategorische Imperativ)に基く道德說に永遠の眞理があるのを是認する。善は又人間の嚴肅な至上要求である。(近世の人文に於て、此莊嚴な眞理を、生活の上に實現した巨大な人はトルストイである。余は彼の一生を繙く每にカントの言葉を想ひ出し、又人間に潛む「道德律」に嚴かな感じを抱かざるを得ぬ、彼の思想は批評を免れぬとしても、彼の一生は凡ての批評を無價値にする)。善爲には神の意志の完了がある。善に於て人は人を抱き又神を抱くのである。善は愛である。善は美である。(屢々道德と藝術とは反目の爭論を重ねてゐる。然し余は善と美とが矛盾するものとは思はぬ)。

信仰とは何を意味するであらうか。個人が絶對者を抱かうとする無限の本能

である。實在に對する思慕、神に對する崇念は彼等の抑へ得ない熱情である。宗教とは人間と神との逢接である。無邊の歸依は無邊の昇天である。その時一小自我は宇宙の根柢に融合するのである。既に事物が在るのではない。只神なる實在があらゆる莊嚴を以て顯現せられるのである。自我も自然も渾一に遷つて永遠の意味が漂茫として流るゝ如く萬有を浸すのである。光華の境である、至樂の狀である。余は必ずや一切の人間生活がその究竟に於て宗教に面接すると想ふ。美の感激も、眞の闡明も、善の行爲も共にその終局に於て神の內生を表示する。人文の榮光はその宗教であらねばならぬ。人間の誇りは彼の神であらねばならぬ。萬有は既に神前にある。

'Each is not its own sake,
I say the whole earth and all the stars in the sky
are for religion's sake.'— Whitman

實在はその顯現に必ず溫く親しい過程を擇むである。この至樂の刹那を形容すべき言葉を數へ得るなら、恐らくは戀句に終るであらう。抱擁 Embrace である。接觸 Contact である。思慕 Eros である。親交 Intimacy である。愛着 Attachment である。情愛 Affection である。和絃 Accord である。結合 Union である。献身 Devotion である。共鳴 Resonance である。應答 Response である。內感 Empathy である。同情 Sympathy である。(此最後の字をベルグソンは好んである)。一言にして言へば神と人との婚姻である。神としての實在は常に愛そのものである。

之に反して人間が經驗する凡ての悲哀は此結合の破壞に基いてゐる。關係の斷絕は自己の破滅であり自然に對し神に對する汚瀆である。人間の罪業は凡て分離から起る悲慘な結果である。反目爭鬪は自然の意志に對する愚昧な反逆である。人文の擾亂は知と情との反目にある、肉と心との隔離にある、天と地との

區分にある、自然と人間との疏遠にある。凡ての噪音は和絃の美を破るからである。自然は愛せよとの敎への許に對立の性を得たのである。二つのものは反く爲ではない、一つに結ばれる爲である。人が人を屠るのは餘りに慘憺である、自然の意志に悖る罪を犯すからである。肉體の苦行は背理を想はせる、心靈を傷けるの矛盾を犯すからである。自己を僞る事は醜くある、自己を幽閉するの愚に終るからである。天才を誹謗する者は貧弱である。彼は非難に自己の空虛を表白するからである。自然に愛を感じないものは白痴である、彼は美の招きを棄てるからである。自己を愛さない者は卑しく見える、貧しい個性を以て他人に近づくからである。神に冷かな心には死の相がある、人にして木石に近いからである。人は神意の愛を充たさねばならぬ。神は別離の悲哀を知つてゐる。神は凡てを彼に招くのである。明日爐に投げ入れられる草にすら彼は愛を注いでゐる。東洋の聖者は神の前に殺生を謹んでゐる。彼等は神の悲みを知る

からである。

'A robin redbreast in cage
Puts all Heaven in a rage.'

'A skylark wounded in the wing
A cherubim does cease to sing.'—Blake

哲學者は彼が實在を忘れる時、神の眉に顰みがあるのを知らねばならぬ。嘗て詩人が歌つた樣に地の花を傷める時、天の星をも傷めつゝあるのである。

吾々は神に更に深い心を捧げる爲に吾が個性の擴充を志さねばならぬ。神はその偉大を示現する爲に偉大な個性を擇んでゐる。充全な實在は充全な個性によつて味はるゝ事を待つてゐる。吾々は個性を廣汎な自然に活かす爲に自己に無邊な昇揚を與へねばならぬ。個性を閉塞する一切の行動は神の名の許に切り棄てられねばならぬ。個性の隱匿は神の幽閉である。無邊な自然を抱かうとす

る者は、自己に無邊な開放を與へねばならぬ。個性の自由な表現は神の宏大な抱擁である。表現とは自己を外界に露出し、個性を對象に活かすのである。その時主觀は客觀化され、全個性は全自然に一致するのである。神に沒入する狀態である。裏面よりすれば自己滅寂である、忘我である。表面よりすれば自己擴充である、永生である。最大な主觀は常に最大な客觀であり、最大な個人性は常に最大な社會性である。高貴なアリストクラシーは宏大なデモクラシーである。ニィチエはホイットマンである。(余は個人主義と社會主義とは同一な理想を他面より見つゝあるのであると思ふ。眞の個人主義は眞の利他主義である。自己を擴大する時、彼は他人を擴大しつゝあるのである。今日客觀的眞理と見做されてゐるものも、嘗ては一個人の主觀的眞理であつた。偉大な人間は、萬民の人間である)。

個性の無邊な擴充に於て、吾れは自然そのものを抱いてゐる。かくて一小自

我は宇宙の一切に飽和するのである。宇宙意識 Cosmic consciousness はかゝる時悅ばしくも吾れに照り輝いてくる。吾れは至る處に他の吾れを見出すのである。凡てのものは吾れにとつて同胞である。ホイットマンは此友愛の心に活きた詩人である。彼は一切の人に一切の物に愛を感じたのである。聖フランシスが鳥に向つて「我が姉妹」と云つた心も茲に了解せられるのである。彼の有名な「太陽の頌歌」は曾て謳はれた最も深い自然の讃歌である。太陽も月も水も火も又は地も彼にとつては慈母であり兄弟であり姉妹であつた。基督も神を「吾が父」と呼び自らを「神の子」と呼んだ。此天の幕屋に憩ふ凡てのものは神の血に於て同胞である。凡ては實在の子である。古印度の宗教は此心に溢れ漲つてゐる。彼にとつては行く雲にも、流れる川にも人の言葉があつた。嘗て雷鳴に神の忿怒を感じた人間の恐れは、只意味ない妄想であらうか、余は彼等の思想にも犯し難い神聖があると想ふ。畫家が樹木を畫く時、彼はその枝に幹に人間の

gesture を感じるのではあるまいか。余は人間を自然に見出す時、美感の高調が與へられるのであると思ふ。最高の藝術は何等かの點に於て象徴的である。それが如何なる題目を擇ぶにせよ、彼等にはいつも人間そのものゝ深い象徴がある。(例へばかの潑溂とした一切の原始的藝術は甚だしく象徴的である。又近くホッホの作品の如き何等理想畫的分子はないが、著しく象徴的である。彼が畫く焔の自然には焔の畫家自らが活きてゐる)。

自然に愛を感じる者は、自然に人間を見出してゐるのである。自然には親しげな相貌があり、應答がある。笑ひと怒りと喜びと悲みとは只人の世に限らるるのではない。自然には人の心がある。實在には人の靈がある。神は人間に屯するのである。

'.....for Cities
Are Men, fathers of multitudes, and Rivers and Mountains

Are also Men; every thing is Human, mighty! sublime!'—Blake

想ふに自然は愛に漲れてゐる。愛は神に歸る心である。人は神の故郷を何處に求めるであらうか、ジェルーサレムは彼等自らの裡にある。思慕は美はしい圓周を畫いてゐる。愛の旅路は神への旅路である。人は悦ばしくも彼の誕生を神に發した事を悟らねばならぬ。創生は神意である。余は愛に飢ゑる。自然も愛に飢ゑるが如く見える。余は何を以て此飢ゑを人に充たし得ないであらう。

'I am he that aches with amorous love;
Does the earth gravitate? Does not all matter, aching attract all matter?
So the Body of me, to all I meet, or know.'—Whitman

一切の事物並に一切の人間は生れ乍らにして'プラトニスト'である。

一九一五年一月稿

神に關する知識

（千九百十五年十月少數の學習院學生の前に於てなしたる講演の一部）

神に關する知識

序

凡そ人が思念し得る最高の問題こそは今諸君の前に提供する此問題である。實際如何なる論題も此究竟題材に比しては尚部分に過ぎぬ。亦如何なる解答も此巨大な疑問に對しては尚貧弱である。が然し此題目こそは吾々の理知にとつて又生命にとつて至大の榮譽である。何人もいつか此問題に觸れずしては世の眞諦に達する事は出來ぬ。いつか又何れかの道を踏んで此第一義の事實を體驗する事は吾々の心に漲る力强い要求である。

凡ての河がいつか太洋に注ぐ樣に、一切の事項は求心的に神の焦點に集中する。如何なる流れを選ぶにせよ、吾々は自然の嚴かな意志の許にいつか神の太洋に乘り出でねばならぬ。事は至難である。然し吾々に取て是程の祝福はない。余は望を抱いて此榮譽ある題目に漸次肉迫して行かうと思ふ。然し此最高の問題に對して吾々は相應はしい用意と決意とを持たねばならぬ。何人か神を語る事に名譽の感激を覺えないものがあらう、同時に何人か彼の答へに傲慢を感じ得るであらう。所詮は神を語る者は、その偉大に對する感激と、それを表明する言葉の不敏とに終らねばならぬ。此講演は寧ろ余の思索の懺悔であつて、何等充全な解答を諸君に與へようとして志したものではない。或生理學者は彼の知識を以て生物の人造を夢みた。然し生物に關する如何なる精密な科學的研究も、與へ得るのはそれに關する知識であつて、生物そのものではない。同じ樣に如何に深遠な神に關する知識も、吾々の內に神そのものを示現し得るのではない。

神に就ての知識は畢竟神に就ての知識である。余は諸君に神を示すが如き夢想を抱くものではない。只人性に關する理解に對して生理學が必要である樣に、神に對する理解には神學も亦緊要であらう。茲に神學とは廣い意味で凡て神に關する知識を指したのである。只ハッラーがハッラーの生理學を殘した樣に、余も亦余の所有する神學以外のものを諸君に與へる事は出來ぬ。凡ての動作、言語も畢竟はその人の以上をも亦以下をも示すものではない。況んや神を語る時人は彼自らを最も露骨に告白するのである。余は一つには望を抱いて一つには謙遜の心を以て、此講演を神の審判に委ねようと思ふ。後日恐らく余はその內容の幼稚を正すであらう。否、諸君と共に更に一步を進めたい爲に今余の現在の哲學的信仰を披瀝するのである。現在は未來の母である、嬰兒こそは人の父であらう。吾々は吾々の貧しさに盲目であつてはならぬ、然しそれが爲に希望をも失ふ可きではない。

所論を進める前に論者のなすべき義務として先づ論題の內容範圍と、次には論歩が選ぶべき方法とを簡明にしておきたいと思ふ。正しく云へば此講演が取扱ふ內容は「神の理解に關する論理的知識の限界」と題すべきである。如何にして神は知らるゝか、彼を知るとする論理的知識は如何なる內容であるか。その限界は如何、是等を論じて神の本性を分明にしその理解を全くしたいのが余の意志である。

神の內容が無邊であるにつれてそれに近づく途程も恐らく無數である。花を譬へにその要旨を歌ふ事も出來よう、又色彩も音響も、神を示すに足りる道であらう、余が玆に選んだ道は究理の一途である。誰が神を宗敎の專有物と云ふであらう。哲學の歸趣も亦神の內に在る。多くの宗敎家は感情の上にのみ神を見出してゐる。然し誰が究理の心と感情とを離婚せしめたのであらう。かゝる分離は只人爲的であつて、寧ろ神への無數の道を只一面に局限した思想に過ぎぬ。

究理も亦生活である。哲學者は彼の究理心に神を生活せしめてゐるのである。

その性質上余は此道を踏んで進む一人である。必然余が玆に神を說く色調は哲學的である。然し余は所謂哲學の正統派に屬する者ではない。余は寧ろ大膽にもその根本義に於て哲學の孤立を否定するのである。然し之は哲學に對する侮辱ではない、寧ろ哲學の名譽の爲にである。余は哲學と宗敎と藝術と、更に又科學をも含めた一者の學を明かに樹立させたい志にかられてゐる。是等四者の分離は人文の方程としては是認すべきであるが、歸結としては許すべき事ではない。余は此統一的學の存在を新に齎らさうと考へてゐる。此學の基礎として余は宗敎若しくは哲學に現はれた神秘說 Mysticism の立場を採つてゐる。從つて此立論も神秘說に立脚する認識論的見解である。例へばロイスの樣な哲學者は哲學として神秘說は不可能であると云つてゐるが、余は之に反して哲學の根本的基礎は却て神秘說の上にのみ見出さるゝと信じてゐる。之によつて哲學が

宗教又は藝術に對して如何なる關係に立つかを理解し得ると思つてゐる。然し此事は別に論ぜねばならぬ。余は直接諸君の心に訴へて余の本論に今入らうと思ふ。

一

夥しい寺院又は教會と之に歸依すると稱する人類はその數に於て幾千萬あるか分らない。然し不思議にも神に關して明晰な理解を持つ者をどれだけ見出し得よう。彼等の信仰は單純に傳習的であつて、その內容を意識する者の數は微弱な率に終つてゐる。多少批判的に思ひ惑ふ者の聲は何であるか、信徒からは卑しとされる神の存在に就ての疑惑である。然し此懷疑的態度は傳習的信仰よりは遙かに進んでゐる。信徒に向つてすらも多少鋭く詰問するならば、その答

べには躊躇が見える。然し此躊躇は神に關する一層優れた理解の發端である。

習慣の信仰に滿足し得ない多くの人類が神に思ひ惑ふ時、何事よりも第一に神の存在に就て知らうと企てゝゐる。此企は慣に傳習からの離脱であり、又神に近づく第一歩である。が然し余の見地によればかゝる態度も尙不徹底である。彼等の欲する處は何であるか、信仰は神の存在の確立に於て始めて可能であると云ふのである。之は一見思考の正當な要求の樣に思へる。最も精密な知識を與へると云ふ科學は凡て實驗と云ふ方法に依つてゐる。物質不滅則は最初から信じられたのではない。吾々は誤のない實驗と數測とによつてその事實を知るのである。知る故に此法則を信じるのである。實際科學的信仰に對して此實驗的知識が重要な根據である事は爭はれない。同じ樣に事實を尊ぶ吾々の習性は、先づ神の存在を知らねばならぬと考へてゐる。從つてその存在の論理的又科學的證明が彼等の要求である。然しかゝる態度は正當であらうか。余は簡潔に批

判の鋒を之に向けようと思ふ。

人は神がゐるならそれを信じようと云ふ樣な態度をとつてゐる。彼等が信仰問題に對して逢着する最も困難な題目は何であるか、「神は存在するか否か」と云ふことに歸着する。然しその結果はどうであらうか、殘るのは只二途より外にはない。一つは存在を證明し得るなら信ずると云ふのである。一つには證明し得ないなら信じ得ぬと云ふのである。彼等が當面の努力はその存在如何の問題に集中する。一面から見れば神の存在はその證明の可能に依賴される事になる。之は一見奇異に見える、然し之が神に對する人類の最も普通な態度である。

時として彼等はその存在の證明に向つて精細な斷定をさへ下す、然しかゝる事が證明し得たと假定してもその結果はどうであるか。彼等は證明し得た故に神を信仰すると云ふだらうか、それならそれは條件付き信仰と呼ぶ事が出來よう。證明の可能を條件として現はれる信仰だからである。諸君はかゝる信仰の

みが絕對信仰であると思惟するだらうか、事實は之と正反對である。凡て或條件の許に立つ事實は相對的である。一方が破れるなら必然他方も破れねばならぬ。如何なる客觀的理由が諸君の證明をして條件でないと云はしむるだらう。かゝる信仰は相對的信仰たるに過ぎぬ。只絕對的事實に於てのみ滿足せられる宗教は、かゝる條件附きの信仰の上に樹立されるわけがない。彼等の態度に從ふとしたら證明の不可能は宗教の否定と云ふ單純な然も淺薄な結論に終つてくる。證明出來なければ更に又その證明を理解し得ないなら吾々は信仰を放棄する迄である。然し之が果して信仰の面目であらうか。神の存在は立證の有無にかゝるのであらうか。甚だ哀れな事實が玆に起つてくる。假りに諸君が精密な立論の許に現今吾々に滿足し得る證明を爲し得たとする。然し此事實すらも不幸な運命に終る事は必然である。事實によれば吾々の理智は尙發展の階梯にあるではないか。恐らく吾々は尙持つべき多くの眞理をまだ開かずにゐる。知性に

訴へて證明の確立に努力するとしても、それは何等絶對不變の信仰を產むものではあるまい、更に理知が發達して前の證明の不足を知るに至れば、在來の信仰は夢の樣に過ぎねばならぬ。之は余の想像ではない、屢々歷史が嘗めた悲慘な傷であつた。それは事實である。例へば科學が急速の發展をとげた十九世紀には著しい信仰の動搖があつた、凡てが實驗によつて提供され世界が一層物質的に批判された時、多くの傳習的信仰は打破せられたではないか。彼等は新しく得た理知を以て證明し得ない幾つかの問題に逢着した。彼等の問ふ處は依然として「神は存在するだらうか」と云ふ疑問の反覆であつた。

然し神の信仰はかゝる問を以て始まりその答へによつて定まるものであらうか。神は存在を證明の可能不可能に托してゐるだらうか。それは甚だ危險である、何故なら吾々は實際證明出來ないかも知れないからである。かゝる不可能が可能でない事をどうして保し得よう。諸君古來何人が神の存在に不變的證明

を與へた者があらう。若しかの聖アウグスティヌス以降中世の熱心な宗教哲學者の立論若しくはかのデカルトの有名な神の存在に關する新證明が充全な立證であるならば、吾々はそのまゝにそれを信ずればよいではないか。若し既に證明し得てゐるなら、吾々の義務はその證明の繰り返しに止まればよいわけである。さうすれば神は既に存在する事になるからである。然し人類が今尙神の存在を想ひ煩ふのは何が爲であらうか、未だ此世には萬民不變の共有な然も永遠な證明がないからである。誰が果して充全不二の證明を與へ得るであらう。多くの人が信仰を得てゐないのも訝るに足らない。彼等の不信仰は衰れにも證明が未だ出來てゐないからである。

然し不幸な結果は之のみではない。假りに何人かゞ理性を滿足さす程の證明をなし得たとしたならその結果、果して信仰は湧き溢れるだらうか。玆に最も都合の惡い一事が絕えず吾々に附き纏つてゐる。それは外でもない。各人その

個性テムペラメントを異にすると云ふ動かし難い一事實である。其容貌の異質と共に吾々の感情、又は理知すらもその色彩は異つてゐる。他人は證明し得たと云つても吾々には不足である場合がある。他人の信仰がどうして吾々の信仰にならう。よしその信仰を條理的であると想像しても精細に同一に理解し得ぬ時もあらう。他人の理解は直ちに吾々の理解とはならぬ。吾々は全然自ら「神は實際存在するのであるか」と自己の理知に訴へねばならぬ。他人の證明は吾々にとつて何等絶對の力を持つものではあるまい。所詮は各〻此難關を切りぬけねばならぬ。必然證明は多岐多樣となるではないか。唯一不二の證據とは只人類の妄夢であらう。諸君がその信仰を存在の證明の上におかうとする限り、かかる障害は踵をついで亡靈の樣に諸君を追ふであらう。

茲に問題を複雜にする事が更に一つある。之は互の個性氣質の相違から來るのではない。今度は知識そのもの、性質に起因する障害である。知識は必ず二種

の對立的內容を包含する。それは何であらうか、定律、不定律と云ふ論理に現はれる互に矛盾した二項である。論理的斷案が一種なら事は容易である。然し斷案にはいつも「然」「否」と云ふ肯定否定の二面がある。「有る」と云ふ斷案は只「無い」と云ふ反律に對してのみ意味がある。肯定とはいつも否定の對立としての肯定である。純粹に反律と云ふ事なくして正律は存在しない。裏のない表と云ふ事がそれ自身背理である樣に「然」は「否」なくしては有り得ぬ「然」である。肯定は畢竟否定の否定である。「有」と「無」との間には相對的關係がある。此二面的事實は單に理論上然るのみではない。人文史上に絶えず相反の二潮流を起したのも此事實に源を發してゐる。一つの眞理を肯定する者があれば、吾々は殆ど安全にそれを否定する者の出る事を豫想していゝ。一定不二の思想と云ふ樣なものは永續し難い。人は此二つの潮流の何れかに加つてゐる。論爭は避け難いその結果に過ぎぬ。理知を尊ぶ唯理論があれば必ず之に反して直觀を愛

する經驗論が起つてくる。唯心論と云へば唯物論を直ちに聯想する位である。天國に對して地獄を恐れ、善に對して惡を思ひ、美の傍に醜を避けようとする。正を慕ふ者は必ず他方の邪を棄てねばならぬ。此對立はいつも不可分離である。「神はある」と或者が證明した時、「有」の對峙として「無」と云ふ反論が輒に豫想されるではないか。從つてかゝる「有」は相對的な「有」ではないか。諸君が神の存在を證明したとするとき、その證明こそは「不證明」と云ふ事の對峙に過ぎないではないか。求めて得たその解答は何等それ自身絶對な斷案ではあるまい。吾々は反對名辯をすら許さぬ一切の相對性を絶した神をこそ求むるのではないか。諸君の努力は諸君を欺くとも、靈の救ひにはなるまい。「神は存在するか」と云ふ第一質問は寧ろ徒勞である。「神は存在する」と云ふその解答も不滿である。「神は存在せぬ」と云ふ否定も淺薄である。

證明し得ると否とに拘はらず諸君の努力に對する酬ゐは貧しい。それは態

度の誤謬から起る悲劇である。諸君の願望は甚だ不當であり、その信仰は條件附であり、その證明は相對的である。更に優秀な內容に對しては、たやすく瓦解する貧寒な思想に過ぎぬ。諸君は「神があるなら信仰する」と云ふ樣な幼稚な下級な態度を一刻も早く放棄せねばならぬ。

然もかゝる萬難を排して諸君が神の存在に關する知識を得たとして見よう。然しそれでも滿足は得られまい。不幸にも諸君の得たのは神に關する知識であつて神そのものではない。之は實際余自身が親しく嘗めた苦悶であつた。此事實は吾々を殆ど失望の淵に陷らしめるではないか。神は果して不可解であらうか、余はさうは思はぬ。

先づ收穫を急ぐ前に吾々は土塊に鋤を加へねばならぬ。余は諸君の態度を解剖し開拓しつゝ漸次に諸君と收穫の悦びを共にしたいと思ふ。

諸君の目下の要求は神が存在するか否かを知らうとするのである。それなら

先づ諸君の理知詳しく云へば論理的知識は果して神を知る能力があるか。又知り得るなら如何なる點迄知り得るのであるか、先づ之を究めねばならぬ。さて問題は吾人の知力は無限の可能性を有するか、即ちそれは絶對者としての神を知り得る力を有するか、もしそれに限界があるならば奈邊に存するのであるか、哲學上かゝる知識的認識の可能性及性質を研究する部門を認識論と呼ぶのである、扨余のとるべき道は今諸君の立脚地を認識論的に批判する事にある。

二

凡て知識と名付く可き程のものは、それが必然的且つ普遍的眞理たる爲には論理的正確性を保有せねばならぬ。非論理的であり又無論理的である知識は吾々の信頼すべき眞理とはならぬ。諸君が神の存在に關して充全な證明を得ようとするなら、吾々は先づその知識から論理的正確性を要求せねばならぬ。只一個人にのみ又は只一條件のもとにのみ意味を保つ知識であるなら、更に又それが何等の法則秩序をも踏まない知識であるなら、それは萬民の共有財産たる價もなく又萬年の眞理たる力もない。凡て論理の闕を下る知識は躊躇なく切り棄てねばならぬ。扨余が之れから取り扱はうとする問題は諸君が假りに得たとする論理的知識の内容に關する批判である。若し諸君が神の存在の證明を充全な論理的根據に依托したならば、それから吾々が何を導き得るかを考へねばならぬ。諸君の抱負は必ずやそれによつて神の存在を確立し示現せしめようとするのであらう。諸君は誇りを以てその論理的内容を指示して、神の實在が動かす可からざる事實である事を喧傳するであらう。然し余の觀察は諸君の主張よりも一層緻密であることを要求する。問題は論理的知識の性質に就てゞある。云ひ換えれば如何なる點迄論理的知識は實在を知り得るかと云ふ一點である。果して

その力は神を示現し得る程無邊であるか。然らずばその限界は如何。所詮論理的知識の可能性に關する問題が起つてくる。今吾々に哲學的に興味ある問題は、知識が論理的であるか否かと云ふ事よりも、論理性そのものゝ內容である。諸君が神の存在を論理的知識に依據させようとする限り、吾々は先づ知識そのものゝ內容性質に關して知る處があらねばならぬ。一言で問ふなら諸君の知識は果して神そのものを知り得る力があるかと云ふ事に歸着する。吾々は先づ此問題に肉薄せねばならぬ。何故なら此認識の問題は凡ての學の出發だからである。問題は微少である、然し專門的難澁に染まる事なく、容易に諸君の理解を招かうと思ふ理論はいつも乾燥に響くがそれも熱情を充たす一途と知らねばならぬ。

凡そ眞理への道は二つある。眞理を對象として之を外部から觀察しようとするのはその一途である。之は間接知とも云ひ得よう、凡ての概念は此知識を代表する。然し知識は之に盡きるのではない、知識が直接眞理そのものゝ體認である

場合がある、之は眞理そのものゝ內面に入る謂である。此一途は前者に對して直接知と名づけ得よう。例へば直觀的事實は此知識の紛ふ事ない表明である。或者は一方を記述的知識Knowledge of Description と云ひ他方を體得的知識Knowledge of Acquaintance と呼んでゐる。普通知識と云へば前者を指すのであつて、後者は之に對して味識とも云ひ得よう。此眞理への二途は從つて吾々の態度に二樣の著しき色調を染めてゐる。一方は純粹に理知の法則を踏んで實在に至らうとするのである、理性を信賴する者が概念の道を辿つて順禮の旅を續けるのは自然である。

哲學史上合理論Rationalism 特に唯理論 Intellectualism と名づけられるものは此テムペラメントを代表する著しい思想潮流である。彼等は理論的である。理知に對する絕對信賴とそれによる理論の正確が彼等の抱負であり、引いては彼等が信じる不變の獲得である。彼等はその動かし難い證明によつて、實在を

指摘するのに憚らない。凡て理論の正確なく、云はゞ合理を缺く一切の斷案は彼等が厭ひ嫌ふ知識である、彼等は先づ知らうとする要求にかられてゐる。次にはその充全な知を以て實在を捕へようと志してゐる。もとよりその道の可能である事を彼等は疑つてゐない。

實際此一途は啻に哲學の專有のみではない。寧ろ廣く一般の事項に對して好んで適應される方法である。特にそれが何等かの依賴に關する場合には人々はいつもその經路を要求する。理に合へるか否かは信賴の有無に關はつてくる。今吾々が論じる神の存在に就いても諸君がとる態度は合理法である。先づ要するものはその存在に對する合理的證明である。信仰はその解答による結果に過ぎない。諸君は多くの場合實證論者（Positivist）に近い、その信仰の基礎を出來得可くんば、科學的實證の上におかうとするからである。かゝる實證は諸君が以て最も合理的と見做す知識だからである。よし科學に傾かずとも理知を愛す

る事に於て之はもとより合理論者又は唯理論者が好んで擇ぶ眞理への一途である。

然し知識は理知の支配にのみあるのではない。又理論をのみその正確な出發とするのでもない。知識が鮮かな事實を基礎として成立する場合がある。之は飛躍的であり一層直觀的である。此場合吾々は實在を前に取り扱ふのでなくして實在を內に味ふのである。知識は對象に關する知識ではなくして對象を絕した第一者の知識である。實在の知識ではなくして既に實在の體得である。吾々は岸に立つて流を見る行人ではない、流れに棹す舟人である。

然し諸君の態度は一途ではない。少くとも諸君の信仰は神の存在の證明の後に來るのであるから直接的直觀的理解ではない。一層理知的である所以は諸君が信仰に先つて先づ神の存在に就て知り又それを論理的秩序のもとに證明しようと企てゝゐるからである。然も此企ての成功に於て、始めて諸君は神を信じる

と云ふ態度をとつてゐる。もし此理論的知識が人間の最後の知であり、且つその機能が究竟的であるなら、諸君の態度は唯一道であり、從つて之に挾む可き疑問の餘地を見ない。然し此點が今余の批評の標的である。吾々は吾々の論理的知識を全然信賴する前に、先づその內容機能分域に就て考察する處がなければならぬ。余は今簡明に此問題を解說しようと思ふ。

論理的知識又は起述的知識とは何事かに關する知識である。此關係を離れてはもとよりかゝる知識は不可能である。何故なら對象のない知識と云ふが如きはそれ自身背理である。從つて論理的知識は必ず何等かの論せらるべき對象の存在を豫想する。約言すればかゝる知識は對象の是認に於てのみ可能である。對象の絕無は引いて知識成立の不可能を內意する。

如上の要件から吾々が容易に演釋し得る一つの事實が此對象的知識の性質として附きまとつてゐる。卽ちかゝる知識の成立は二個の世界、卽ち立論する主

體と論議せらるゝ客體との存在である。吾々は何事かに關して立論するのである、此「關して」と云ふ關係は直ちに主客の對立を指示してゐる。從つて吾々は對象に關して得た吾々の知識と、對象そのものとを同一視すべきではない。論理的內容は永遠に關係の世界に止るのであつて、第一者としての對象そのもの、內容ではない。單に記述的間接的知識であつて、對象自體を表現する體得的知識ではない。論理的知識と實在との間には渡り得ない間隔がある。吾々は此事實を理解する事によつて、かゝる知識が相對的知識である事に氣づくのである。何事かに關する知識である故に對立的であつて、何等絕對的知識を表示するものではない。知識は此場合遂に相對域を越えない二元的關係にある。吾々の知識と實在そのものとは同一物ではなく、既に一元を離れて二元界に遷つてゐる。論理的判斷の可能はかくて相對界に止つてゐる。

右の反省によつて理解し得る樣に、知識はかゝる場合實在そのもの、內面的

味識ではなく、それを抽象し來つた外面的知識である。

吾々が要するものは絶對者としての神である。然もそれに對する信仰は直ちに絶對者の第一者的把握であらねばならぬ。絶對者を既に相對的知識に於て理解するならば、それは既に第二義の神である。その理解も亦第二義の複寫に過ぎぬ。吾々は神を神そのものとして體認せねばならぬ。神に關する間接知は吾々が要求の糧たるにしては餘りに貧しい。吾々の切に欲する處は神を第一者として體認するにある。云ひ換えれば神と吾れとの對立的關係を絶せねばならぬ。眞の神は吾々の對象たる可きものではない。直下の經驗と云ふが如き具像的事實は既に對象に關する知ではない。第一者としての味識である故に、それは對立的關係に於てのみ可能である論理的知識の圏内に入る事は出來ぬ。若し知識がそれを取り扱ふなら、それは既に直下の經驗からは遠く離れて、その表象を對象としてゐるのである。物自體の知識とは内面的理解を指すのであるから對象知

識とは區分せられねばならぬ。論理的知識はものゝ「前」にあるのであつて「内」にあるのではない。内よりの理解とはものそれ自體との合一によつて始めて體得せられるのであつて、外面よりの考察は只吾々に對象に關する知識を與へるに過ぎぬ。批判は既に後の事に屬する。眞の味識には批判も亦言葉すらも表はれぬであらう。花を見て美はしいと感ずるその直下の經驗時には「美はし」と云ふ批判すら起つてゐない、花は吾々の前にあるのでなくして心の内に活きてゐるのである。花と吾れとには何等の間隔もない。兩者は未分の境地にあつて只美の流れに流れつゝあるのである。「美はしい」と云ふのは既に花を前においての考察である。美感の刹那こそ活々した直接知である。かゝる感激の瞬時と反省的考察とは區劃されねばならぬ。前者は味識であり、後者は記識である。

凡てかゝる記述的知識の起原は對象から自己を分離さす事に基いてゐる。ものに自己を對立せしめて起る知識である。兩者が渾一體に流動する未分の境地

は茲に分割され二分されるのである。自己の分離は知識を產む、然し實在を現はし得ない。個性は眞理の批判を產む、然し個性と外圍との渾一に於てのみ眞理の體現がある。諸君の論理的知識こそは實際精密な神の存在に關する批判を產むであらう、然しそれは批判であつて神そのものゝ體得とはならぬ。諸君が若し神そのものを內に抱かうとするならば、諸君の理知的努力はいつか諸君を欺くであらう。それは神に關する合理的知識であるとしても、神そのものゝ內面的理解ではあるまい。

かゝる知識は外面的であり、對象を前に許しての知識である。畢竟相對二元の關係に於てのみ可能なるに止まつてゐる。得るものは間接知であつて直接知ではない。第二知識であつて第一知識ではない。如何にしてかゝる相對的知識が絕對者としての神を理解し得よう。

三

吾々は論理的知識の價値を云爲する前に、先づその性質に就て明晰な知識を持たねばならぬ。眞理を論理的體系の上に築く者が、いつも誇りとする所はその正確性である。論理的知識の正確とは思惟に潛む一定の自然法の運行によつて獲得される。正當な知的判斷及その內容によつて吾々はその知識を論理的と見做すのである。從つて論理的とは一定不變の形式の許に成立する知識を云ふのである。吾々の思惟も亦かの萬象の生命と同じ樣に一定の自然法を踏むである。古くアリストテレスによつて闡明されたこの論理的判斷の根據は次の三法則に基いてゐる。

第一は自同律 Law of Identity. 'A is A.' である。思惟の運行に際して其名辭に內容上の動搖を附加するならば、吾々は一定の結論に達する事は出來ぬ。物は

それ自らと同一であらねばならぬ。人は常に人である約束の許にのみ人に關する立論は行はれるのである。第二は矛盾律 Law of Contradiction. 'A is not not-A.' である。或物を肯定するならばそれを同一事情の許に於て否定する事を許さぬ。人間が動物であるならばそれは同時に植物たる事は出來ぬ。一旦肯定された事實を同一狀態の許に更に否定する事は既に背理である。若し是等を認許するならば斷案は到底矛盾錯誤の圈内を脱する事は出來ぬ。第三の法則は所謂排中律 Law of Excluded Middle. 'A or not-A' であつて、或者を肯定するか然らざれば否定するかの二者何れかであつて、その何れにも屬しない第三位の間容を許さぬ意である。例へば河は流れるか流れないか何れかであつて兩者を共に肯定し若しくは共に否定する事は出來ぬ。卽ち中間位の狀態を許さぬ謂である。「然」に非ずば必ず否であり、「是」であるか「彼」であるか必ずその一つである。

如上の三法則卽ち自同律、矛盾律、排中律は思惟の根本的三原則であつて、對

象の如何を問はず推論の根柢とならねばならぬ。もとより吾々の知識が論理的正確性を保有しようとする限り嚴密に是等の法則は履行せられねばならぬ。余は今此簡短な序說を過ぎて更に當面の問題に入らうと思ふ。余が先に明にしようと努めた事は論理的知識の可能性が間接知を脱し得ない事であつた。故に既に余が問ふ處は諸君の神に關する知識が論理的であるか否かと云ふ事ではない、非論理的である事にもとより吾々の滿足がある筈がない。然し論理的たる事にも余は滿足し得なかつたのである。余は更に此意味を明にする爲に論理の法則を閲して、論理性そのものゝ性質を分明にしようと思ふ。余が神の問題に對して諸君の內心に要求するものはもとより矛盾の所說ではない。然し同時にその論理的整頓でもない。諸君から更に一層深い神の直接知を要求する爲に、論理そのものゝ價値を先づ批判しようとするのである。余が神の存在に關する論理的證明を信賴し得ないのは、實に論理そのものゝ性質に起因する。

若し是等三法則から導き得る結果に就て多少の思慮を與へるならば、吾々は論理的知識の限界に就て尙明瞭な概念を捕へる事が出來る。是等の三律が明かに示す樣に論理的思惟は必ず二個の對立し矛盾する事實の存在を豫想する。卽ち甲が甲である爲には、それが同時に非甲であつてはならぬ。又甲は甲であるか或は非甲であるかその何れかである。此場合甲はいつも非甲に對しての甲である。甲と非甲とは二者相對し矛盾し一致する事を許さぬ。故に論理的眞はいつも僞に對しての眞である。吾々は論理の圈內に於ては裏面を考へる事なくして表面を考へる事は出來ぬ。一方の是認は之に對當する他方の否定に於てのみ可能である。吾々は玆に二個の對立界を持つのみならず、それが互に矛盾界である事をも知るのである。然も一判斷を得ようとする吾々は眞理の名の許に一方の確立の爲には之に矛盾する他方を破棄せねばならぬ。矛盾律が示す樣に「然」は同時に「否」たる事は出來ぬ。排中律が示す樣に答は「然」であるか、「否」であるか

必ずその何れかである。又自同律が示す樣に「然」は「然」であり「否」はいつも「否」である。約言すれば「然」は永遠に「然」であつて「否」は不變に「否」である。兩者を同時に肯定し若しくは否定する事は出來ぬ。是等は互に矛盾し一致せぬ判斷であつて吾々は必ずその何れかを撰擇せねばならぬ。論理は畢竟眞僞の取捨に對する律法に外ならぬ。

扨諸君が今是等の律法を遵奉して、神に關する正確な論理的斷案を得たと假定したい。もとよりそれが神の存在に關する肯定的解答であつても亦否定的決議であつても何れでもいゝ。余の目途とする處はその斷案の論理的內容にあるよりも、諸君が信賴し來つた論理的過程そのものにあるのである。諸君は神を知らうとするに當つて先づ知識の論理性を要求しそこに根據をおかうと企てゝゐる。然し余はこの根據に就て二三の反省を諸君に要求したい。果して其根據は一身の信仰を依賴する程安定な基礎を保有するものであらうか、若し然らず

ば諸君は全然別種の永遠な根柢を求めねばなるまい。問題が問題である、吾々は至上の神に就て確乎とした信仰を捕へようと欲してゐるのである。皮淺な根柢から吾々は一日も早く脱せねばならぬ。

今述べた樣に論理的判斷はその成立に際して甲乙二個の對比を豫想する。所謂定律 Thesis 不定律 Anti-thsis の對比によつて吾々は是否の判斷に進むのである。吾々は眞を確立すると同時にそれが僞の對律である事を知らねばならぬ。惡に對しての善であり醜に對しての美である論理的法則が、常に相對律を豫件とする事は明晰な事實である。「然」は自律としての絶對的「然」ではない、「否」に對比しての相對的「然」である。一方の肯定は他方の否定によつて決定せらるゝのである。獨立自全の眞と云ふが如きは論理の圈內で取り扱ひ得ない眞である。論理の世界は二面的である。吾々は僞を心に畫く事なくして眞を思惟する事は出來ぬ。此無限な二面の羅列が事象の無限なると共に始終し、論理の運行と共

に追隨する。「然」「否」は此論理的二元性を象徵する代表語である。論理が吾々に與へるものは實に是か彼かである。右か然らずば左である。

論理が吾々の眼前に表示するものは此相對立した二個の異る世界である。然も此二面の指摘に論理の使命が終るのではない。更にその何れかの撰擇によつて結果を與へるのである。二個の世界とは論理上の意味に於ては矛盾する世界との謂である。甲と非甲とは一致し得ない矛盾であつて、論理はその間に劃然とした區別を立てゝゐる。是等の調和は寧ろ論理的思惟の運行停止であつて、それは既に知識の構成的要素たり得ないのである。甲は永遠に同一の甲であらねばならぬ。その自由な變換は甲の破壞である。從つて甲の意義を保有しようとする限り、吾々は之に反する一切の矛盾性を驅逐せねばならぬ。必然甲の前にはあらゆる乙(非甲)を排斥する。吾々は論理に於て一つには對立し矛盾する二個の世界を豫想すると共に、一つにはその一方の否定によつてのみ他方の確

立を得るのである。對立し矛盾する二者が同時に肯定され若しくは否定さるゝ事は論理上の不可能事である。吾々は「然」を得るに際して必ず「否」を棄てねばならぬ。論理は徹底的に矛盾の並在を排斥する。實際此論理上の要求に基いて吾々は劃然とした判斷を下す事に躊躇しないでゐる。多くの宗教家が樂園淨土の前に地獄を恐れたのは此故であつた。又かの道德家が善を愛する爲に惡を忌み嫌つたのは此爲であつた。精神の王國を慕つた人々が肉體を矯め苦しめたのも、二個の矛盾する世界を並存せしめ得ない彼等の論理的要求によるのである。世界は二面的である、さうしてその一方の眞を確立する爲に他方の僞を切斷せねばならぬのが論理的人類の仕事であつた。

故に論理の世界は二面的であり、其判斷は一面的である。二面的であると云ふのは「然」はその對比として之に矛盾する「否」の概念を呼び起すからである。判斷が一面的であると云ふのは「然」を肯定する爲には必ず他方の「否」を排斥する

からである。畢竟論理は「然」「否」の對比に起り、その何れかの排斥に終るのである。如上の事實から吾々は明かに二つからなる結論に到着する。卽ち第一は論理の世界は對立的世界であつて、自律絕對の世界ではないと云ふ事實である。若しもその世界が殆めから一元絕對であるならば、對比によつて可能である論理の成立は最初から不可能である。何故なら絕對とは一切の對比を絕した謂だからである。神を絕對者と見做すならば、何の權威を以てその絕對な神を論理的對象となし得るであらう。若し之を許すなら迷誤は既にその出發にある。吾々は既に絕對者としての神を忘れて、神を相對域に於て取り扱つてゐるのである。然し誤謬は之のみに限るのではない。第二に論理的判斷は對立する二者から眞を得る爲に必ず何れかを撰擇せねばならぬ。論理が與へるものは是であるか彼であるかである。兩者を共に肯定し若しくは否定する事は論理的法則の許し得ない罪過である。所詮は一方の排斥である。矛盾の調和と云ふが如きは論